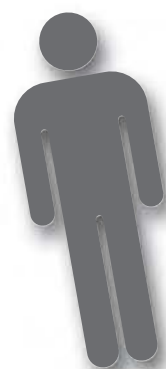
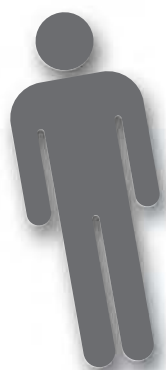




地域に生き世界に伸びる

阪大*Now*



OSAKA UNIVERSITY



No. 85

2005.

10

No.85

2005.10

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウスPECIAL	14
キャンパスニュース	16
表 彰 等	31
人 事	34
名誉教授リレー随想	36
名誉教授の近況	38
訃 報	40
インフォメーション	44
インタビュー	48
海外レポート	50
私の本棚	54
ガイドマップ	55
交流協定大学紹介	56

表紙解説 表紙のデザインを考えるのもコミュニケーションデザインのひとつ

今回の「阪大 Now」に CSCD が取り上げられるにあたり、表紙背景をデザインしました。

ある決まったフォーマット（レイアウト、書体、色、紙質など）の中で、どのようにしたら中身へ繋げる“きっかけ”をデザインできるのか？ 見た目も整えた上で、受け手とどのようにコミュニケーションするか？

このようなことを考え、必要な情報を選びデザインすること。これもコミュニケーションデザインの大事な部分なのかもしれません。

ちなみにこのダイアグラム（関係図）はコミュニケーションデザイン・センターのミッションを表したものの一つですが、果たしてどのような内容を表現した図なのでしょう？

詳細はクローズアップのページをご覧ください。
（コミュニケーションデザイン・センター特任助手 清水良介）



開催挨拶をする宮原秀夫総長

各セッションの題目と責任者

Session A: particle and nuclear physics, astrophysics

久野良孝（大阪大学大学院理学研究科・教授）

Vo Van Thuan (Institute for Nuclear Science and Technology・Dr.)

Session B: solid state physics, applied physics, earth-planetary science

野末泰夫（大阪大学大学院理学研究科・教授）

Nguyen Chau (Vietnam National University, Hanoi・Professor)

Session C: Mathematics

小谷眞一（大阪大学大学院理学研究科・科長）

Pham Ky Anh (Vietnam National University, Hanoi・Professor)

2005(ハノイ)」開催



大阪大学フォーラム2005(ハノイ)開催に参加した来賓

9月27日(火)から29日(木)まで、ベトナム国立大学ハノイ校の協力を得てハノイ市内において大阪大学フォーラム2005が開催されました。

今回で5回目となる大阪大学フォーラムのタイトルは、「大阪大学・アジア太平洋・ベトナム国立大学ハノイ校フォーラム2005：基礎科学の新展開 - 新しい物理学・宇宙地球科学・数学を目指して - (Osaka University -Asia Pacific-Vietnam National University, Hanoi Forum 2005 on Frontiers of Basic Science : Towards New Physics, Earth・Space Science and Mathematics)」です。

実行委員会委員長の大学院理学研究科物理学専攻、大貫惇睦教授を中心に企画、実施し、宮原秀夫総長以下理事等の支援を得て盛会裡に開催されました。

ハノイ市のホーチミン廟近くに位置する国際コンベンションセンターを会場とし、開催初日には、宮原総長からアジアで初めて開催する本フォーラムについての目的と意義等について挨拶があり、その後、Dao Trong Thiベトナム国立大学ハノイ校学長、Pham Gia Khiemベトナム社会主義共和国副首相の挨拶がありました。

また、会場には服部則夫在ベトナム日本国大使を始めとして、日本人120人、ベトナム人170人、その他の諸外国人10人、延べ300人の参加者があり、物理学、宇宙地球科学、数学に関して7人の方々(大阪大学3名、ベトナム2名、ホンコン特別行政区、韓国各1名)のプレナリー・トークと討論が行われました。

28日、29日には物理学、宇宙地球科学、数学の各セッションに分かれての研究発表が行われ、各セッションに関するポスターセッションも同時開催され、最優秀ポスター賞が若手の研究者14人に与えられました。

ベトナム政府側の関心も高く、この大阪大学フォーラム開催が与えた影響は多大なものでありました。同時に大阪大学から参加した90人の若手研究者にも大きな刺激となりました。



バンケットで挨拶するDao Trong Thiベトナム国立大学ハノイ校学長

新しいコミュニケーション回路をめざして



コミュニケーションデザイン・センター長 中 岡 成 文

コミュニケーションデザイン・センターの設立

2005年4月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD：Center for the Study of Communication-Design）が発足しました。CSCDはこれまでの大阪大学にはあまりなかったタイプの組織です。大学教育実践センターのように全学共通教育を行う（ただし、学部生ではなく大学院生が主たる対象）こと、社会学連携・市民サポートを先頭に立って実践し、プロデュースすることが2大ミッションです。学部や研究科ではないので、学部生・大学院生は所属しません。市民とふれあいやすくという目的もあって、吹田・豊中の両キャンパスから出て、万博記念公園の一角、万博記念機構ビルの中にオフィスを構えました。会議室から「太陽の塔」がよく見えます。



CSCDのオフィスがある万博記念機構ビル（左後方はエキスポランド）

コミュニケーションをデザインする

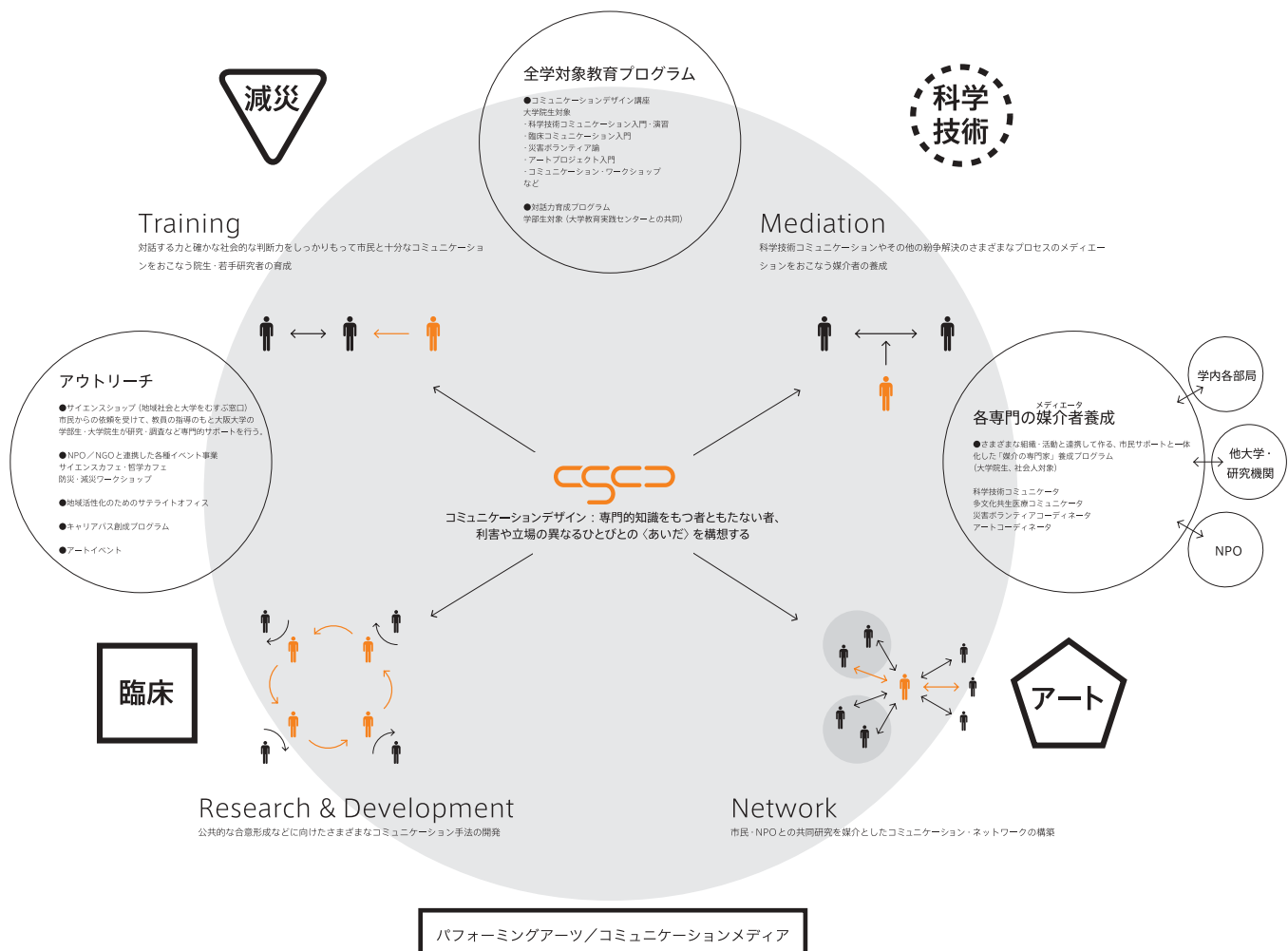
「コミュニケーションデザイン」というのは聞き覚えのないコンセプトでしょう。いわゆるデザインとは少し違います。原子力発電所や食品問題に見られるように、専門家や行政と一般市民のあいだに壁と不信感がある現状を改善すること、利害や立場の異なるひとびとのあいだをつなぐコミュニケーションの回路を構想し、設計することです。

具体的には、当面次の5つの分野にわたって活動します。

1. 私たちの生活や将来に大きな影響を与えるけれども、これまで市民がほとんど発言してこなかった、科学技術の分野。「ちょっと待てよ」、「こんなこと続けていてもいいのか」。科学技術をめぐるコミュニケーション不全を取り出し、ときほぐすデザインの開発をめざします。

2. 自治体や消防・警察任せではなく、被災者（市民）を中心にすえた社会の対応が望まれる、減災（防災）の分野。風水害や地震の予知・予報など、多くの防災情報は専門機関に集中していて、専門家でないとは読み解けません。しかし、住民やボランティアの「防災力」を鍛えていかないと、災害に立ち向かうことはできません。
3. 一方では問題を抱えその解決を求める人たち（患者など）が、他方では具体的な専門知識と技量を持つ実践家（医師、看護師など）がいる、臨床（医療・福祉）の分野。ここでは、確実に信頼性のある対人コミュニケーションが何より大切であり、現場の知恵を継承していかなければいけません。共感力と対話力を高めるプログラムを開発しています。
4. 文字や知識を介さず、多くの人々に直接訴えかける「ちから」を持つ、アートの分野。ただ受身に接し、鑑賞するだけではなく、ふつうの人が自分で作ったり、制作に協力したりすることで勇気や自信が生まれます。痛みや醜ささえ表現することによって、他の人々や社会や環境への洞察力が育まれます。
5. 演劇やダンスのワークショップを通じて、大阪大学の学部生・大学院生に基礎的な表現能力を身につけてもらう、パフォーマンス＆メディア・サポートの分野（支援プログラム）。ネットワークを介して複数の人間が議論をする「議論支援システム」というツールも活用していきます。

コミュニケーションデザイン・センターの活動ミッション



サマープログラムの開催

この夏、CSCDのお披露目をかねて2種類の「サマープログラム」を連続して催し、学生・教職員・一般市民の参加者たちにたいへん好評でした。



全体講座

1つはパフォーミング・アーツのプログラム「舞台芸術にふれよう!」です。午前中は平田オリザ客員教授や鷲田清一副学長による全体講座を聴き、午後は3つのグループに分かれて演劇、ダンス、舞台美術のワークショップを順番に体験します。私も少しためらいながら参加しましたが、いつもの自分とは違う一面を発見し、表現できたような気がします。



演劇 WS



舞台美術 WS



ダンス WS

もう1つのプログラムは、小林傳司教授などによる科学技術コミュニケーションのプログラム「科学技術コミュニケーション演習1(異分野間対話実践)」です。文学、人間科学、法学、理学、工学、基礎工学の6研究科から文理の枠を越えて博士後期課程1年の大学院生たちが集まり、BSE問題を中心に議論しました。この学生たちはそれぞれある研究領域の専門家になろうとしているわけですが、専門家同士のコミュニケーションは困難です。それぞれの専門性というものがどのような「特殊性」につつまれているのかを学生たち、つまり「将来の専門家」たちに実感させることが目的です。それによって彼らは確かな社会的判断力を持ち、市民とコミュニケーションをとることができるようになるでしょう。



BSE問題に関するグループワーク



ふり返りと講評

以上2種類のプログラムは来る12月から2月にかけての時期に再び提供される予定です。関心をお持ちの方はぜひご参加ください。

大学の風土を変える

私がうれしかったのは、サマープログラムに参加した学生・職員のみなさんが意気投合し、サポーターズ・クラブ「CSCD HANDS」をあっという間に結成してくれたことです。大阪大学内でこのような自主的な盛り上がりは珍しいことではないでしょうか。いうまでもないことですが、学生・職員は大学の重要な担い手です。その学生・職員が自発的・積極的に大学のカルチャー形成に参加し、その意味で大学の風土を下から変える。それは大阪大学の発展のためには不可欠なことだし、コミュニケーションデザイン・センターはその風潮を促進する「媒介者」になれればと思っています。

教育プログラムについて

コミュニケーションデザイン・センターは大阪大学の「大学院生の共通教育」を担当することになっています。

はて？ これまでは学部生対象の共通教育科目しかなかった。しかし今後は、大学院生が専門知識を深める一方、視野を社会に広げ、大阪大学の教育目標である教養・デザイン力・国際性をしっかりと身につけることが大切です。そのためには各研究科のご協力により、学部生の共通教育に近い形で、全学の大学院生にできるだけ共通の時間割を組むこと、つまり共通の空きコマを設けていただくことができればと思っています。

平成18年度の開講予定の科目は右表のとおりです。付け加えておきますと、平田オリザさん担当の最後の2科目をはじめとして、学部生（高年次）や社会人の方が受講できるものもあります。

○平成18年度開講予定科目

授 業 科 目 名	単 位 数
科学技術コミュニケーション入門	2
科学技術コミュニケーションの理論と実践	2
臨床コミュニケーション入門	2
ディスコミュニケーションの理論と実践	2
現場力とコミュニケーション	2
減災コミュニケーション	2
減災コミュニケーション	2
アート・プロジェクト入門	4
パフォーミングアーツの世界	2
文理融合創造ゼミ	4

コミュニケーションデザイン・センターが提供する科目は、社会学連携を重視するセンターの性格からして、大学院生のインターンシップをからめるなど、社会の中で活動する意識を育てるものになるでしょう。科学技術コミュニケーションに関していえば、「サイエンスショップ」を近い将来、大阪大学内で企画・運営していきたいと考えています。サイエンスショップでは、科学技術にまつわる身近な問題（人文社会科学の領域もOK）について市民から相談を持ち込まれたとき、それを解決するのに適切と思われる研究者にそれを紹介して、研究者からの回答を市民に返します。ヨーロッパや北アメリカでサイエンスショップは実践されており、持ち込まれた課題を分割して学部生や大学院生に研究させることも少なくないそうです。そのようにして、市民のかかえる問題に対して敏感な卒業論文、修士論文、博士論文が出来上がるわけで、教育効果は高いと思われます。

以上のように意欲的に活動してまいりたいと考えておりますので、ぜひコミュニケーションデザイン・センターにご注目いただき、ご意見やご要望がありましたら、私たちまでお伝えくださいますようお願いいたします。

URL <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp>

なかおか・なりふみ

プロフィール

1950年生まれ。倫理学・臨床哲学専攻。福岡女子大学助教授などを経て、1999年より大阪大学大学院文学研究科教授。
2005年4月よりコミュニケーションデザイン・センター長を兼ねる。医学系研究科「医の倫理学」教授をも兼任している。

役員室だより

2005.10 Vol. 8

法人化2年目も半年が経過し、進捗状況を見極めながら期末における年度計画の達成を目指すとともに、平成18年度の年度計画に思いをめぐらす季節となって参りました。

初秋から、文部科学省主催をはじめ様々なセミナーやワークショップが開催されています。平成16年度決算や平成18年度概算要求に関する事項等について、特に国立大学法人を取り巻く厳しい財政環境下で、各大学の役員をはじめセミナー等の参加者は一様に厳しい表情で聞き入っています。国立大学協会も、来年度予算に関する厳しい状況を鑑み、予算の確保・充実等に関し、決意と強い姿勢を表明し理解を求めるために、文部科学大臣に対し要望書を提出しました。

限られた予算の中、今後も引き続き大阪大学の財政基盤を確立させ、財務戦略の構築により、活力ある大学になるよう努力する必要があると執行部一同は考えています。大学構成員の皆さんの益々のご協力をお願いします。

各室の検討状況

総合計画室

教員組織の在り方に関する検討ワーキングを設置

教育研究の活性化及び国際的な通用性の観点から、助教授・助手に関する制度の見直しが行われ、現在の助教授を廃止して「准教授」の職を設けること、及び現在の助手の職を「助教」の職と「助手」の職に分けることとする学校教育法の一部を改正する法律が平成17年7月15日に公布され、平成19年4月1日から施行されることになりました。

また、現在の大学設置基準では、教員組織として講座制又は学科目制を原則とするような趣旨の規定となっていますが、これを改めて、各教員の役割の分担及び連携の組織的な体制が確保され、かつ、責任の所在が明確であるような教員組織であれば講座制・学科目制以外にも大学が自由に編成できる旨の規定に整備する準備が進められています。

これらの法令改正の動きに伴い、総合計画室の下に置かれている「助手・技術職員等に関する問題検討ワーキング」を改組拡充し「教員組織等の在り方に関する検討ワーキング」を新たに設置して、教務職員・技術職員の在り方に関する検討を含め、大阪大学における教員の職及び講座制・学科目制等の教員組織について検討を進めていくことにしています。

教育・情報室

「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択

教育 COE ともいふべき「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業（創造性豊かな若手研究者養成のための重点的支援）につきましては、大阪大学より 14 件の申請をいたしました。うち 12 件がヒアリングの対象となり、その結果、最終的な採択・不採択の通知がこのほどありました。大阪大学はヒアリングの対象となった 12 件のうち 10 件（補助金内定額 295,611,000 円）が採択されました。内訳は、人文・社会科学系 3 件、理工学系 7 件、医歯薬系 0 件です。以下は採択されたプログラムの一覧です。

文学研究科：ソーシャルネットワーク型人文学教育の構築	（代表・森岡 裕一 教授）
人間科学研究科：「実践的研究者」養成をめざす人間科学教育	（代表・志水 宏吉 教授）
経済学研究科：存在感ある若手研究者養成のための教育改革	（代表・伴 金美 教授）
理学研究科：インタラクティブ大学院教育	（代表・青島 貞人 教授）
理学研究科：学習コミュニティに基盤を置く大学院教育	（代表・荻原 哲 教授）
工学研究科：先導的教育研究融合プログラム	（代表・南埜 宣俊 教授）
工学研究科：実践力向上のメンター制と PB リーダー養成	（代表・盛岡 通 教授）
工学研究科：統合デザイン力教育プログラム	（代表・藤田喜久雄 教授）
基礎工学研究科：学際新領域を先導する 21 世紀基礎工学教育	（代表・田谷 正仁 教授）
情報科学研究科：ソフトウェアデザイン工学高度人材育成コア	（代表・増澤 利光 教授）

大阪大学の採択数は全国トップで、次いで採択数の多かったのは東京大学の 7 件、京都大学の 6 件でした。大学院教育にこれまで熱心に取り組んでこられた各研究科の日頃の努力に、まずは敬意を表します。それとともに、今回のヒアリングでは、大学としての位置づけやサポート体制も評価のポイントとなり、「教養・デザイン力・国際性」という資質の育成と「社会から信頼される研究者・技術者」の養成という教育目標を全学的に掲げ、また他大学には例を見ない大学院における全学共通教育プログラム（コミュニケーション・デザイン・センター担当）を開始した大阪大学の教育への熱心な取り組みが高く評価されたことで、教育・情報室が今後果たすべき責任をいっそう重く感じております。

全学共通教育の特別時間帯設定へのご協力お願い

高度な専門研究に携わる大学院生には、専門研究に埋没しないためにも、裾野の広い「教養」の育成と、自身の研究を異領域の研究と交差させながら未知の知的領域を切りひらいていく「デザイン力」の育成とが、強く望まれます。とりわけ研究者の社会的責任の意識の涵養や職業倫理の教育は、学年の進行とともにますます必要になってくるものです。時代・社会からも強く要請され、文部科学省、他大学からも注目を浴びているそうした先進的な教育プログラムには、昨年 4 月に設置された大学教育実践センターと本年 4 月に設置されたコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）が取り組みます。大学教育実践センターは、全学共通教育科目の学部高学年配当を計画し、CSCD は、連続講義「科学と社会」や科学技術コミュニケーション養成講座、医療コミュニケーション・トレーニングをはじめとする講義や対話ワークショップの大学院配当を次年度より計画しています。CSCD は、本年度 8 月より、それら教育プログラムの試行も始めました。とくに科学技術コミュニケーション養成講座と対話ワークショップには、本学教員・職員、大学院生、市民が数多く参加し、大学院生諸君による自発的なサポーター・グループも早速に形成されました。

しかし、（前回の「役員室だより」でも訴えましたように）これら共通教育プログラムは、全学の学部・大学院の時間割のなかで共通教育枠を設定することなしに実現は不可能です。そこで教育課程委員会がこの共通教育枠をどのように設定すればよいかの検討をさせていただいております。各部署には、大阪大学が全学的に取り組む「教育改革」のため、深いご理解と厚いご支援・ご協力を切にお願いいたします。

学務情報システムの導入経過

学務情報システムの導入作業は特命プロジェクトチームを中心に着々と進められております。とくに教務情報の整備については各学部・研究科の全面的なご協力を仰がなければなりませんので、今後の作業計画について、次回詳しくご報告申し上げます。

研究推進室

21世紀COEプログラム中間評価結果

平成15年度採択の21世紀COEプログラム

- 「感染症学・免疫学融合プログラム」(医学系分野、拠点リーダー：審良静男)
- 「疾患関連糖鎖・タンパク質の統合的機能解析」(医学系分野、拠点リーダー：谷口直之)
- 「フロンティアバイオデデンティストリーの創生」(医学系分野、拠点リーダー：米田俊之)
- 「究極と統合の新しい基礎科学」(数学・物理学・地球科学分野、拠点リーダー：大貫惇睦)
- 「物質機能の科学的解明とナノ工学の創出」(数学・物理学・地球科学分野、拠点リーダー：三宅和正)
- 「原子論的生産技術の創出拠点」(機械・土木・建築・その他工学分野、拠点リーダー：遠藤勝義)
- 「アンケート調査と実験による行動マクロ動学」(社会科学分野、拠点リーダー：筒井義郎)

以上の7拠点についての中間評価結果が発表され、いずれも高い評価が得られました。

大型プロジェクト公募への対応

研究推進室では、大型研究プロジェクト公募に即応することを目的の一つとして、研究戦略WGを設置し、各部局より提案のあった研究グランドデザイン策定を行っています。

最近の具体例としては、(独)科学技術振興機構「原子カシステム研究開発事業」の公募に対し、研究提案の中から関連研究者の科学技術振興機構の情報交換会を開催するとともに、WGを編成し、研究プロジェクトの策定を行っています。また、文部科学省科学技術振興調整費戦略的研究拠点育成事業「東京大学サステナビリティ学連携研究機構」への参画について、研究グランドデザインへの提案のあった研究分野の先生方を中心にWGを編成し、大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究院(Integrated Research System for Sustainability Science)を提案し、採択されました。

今後とも、研究推進室を中心に、このような大型プロジェクト提案、実施に向けて組織的に対応しますので、各先生方のご協力をお願いします。

学生海外短期研究留学助成制度導入

かねてより検討中の、大学院博士後期課程学生の海外の大学・研究機関における短期研究留学等の研究活動を推奨支援し、国際性豊かで創造的な研究開発活動を独力で展開できる人材を育成するための新たな方策として、大阪大学教育研究等支援事業経費により「学生海外短期研究留学助成」制度を導入することとなりました。

本助成では、2ヶ月以上6ヶ月未満に渡り海外の大学・研究機関に滞在し、研究活動を行う大学院生を対象に、100万円を上限として助成することとしています。年2回募集し、各回10件程度を目安に採択される予定です。選考方法については国際交流委員会の下に設けられた国際学生交流推進事業WGで検討を行い、具体的な募集等は研究推進・国際部学生交流推進課において行う予定です。

評価・広報室

業務の実績に関する評価結果の公表

9月16日に開催された国立大学法人評価委員会総会で、各国立大学法人の平成16年度の年度評価結果が決定され、公表されました。

本学の評価結果については、本学が教育研究の推進と大学運営の改革に積極的に取り組んだ種々の実績が十分に評価され、「業務運営の効率化」、「財務内容の改善」、「自己点検・評価及び情報提供」、「その他業務運営に関する重要事項」のすべての年度計画の項目において、進行状況は「計画通り進んでいる」との評定を受けました。同評価結果については、ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

(大学HPアドレス [http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/hyouka\(h16\).pdf](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/hyouka(h16).pdf))

【評価結果抜粋】

1 全体評価

大阪大学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに「第一線の研究を通じた教育」を通じて、社会的、国際的に活躍できるリーダー、研究者、技術者を育成するとともに、研究重点型大学として基礎、応用、実践のすべての分野で世界最高水準の成果を上げることを目指している。

法人化に当たっては、総長のリーダーシップによる明確な大学経営戦略が打ち出されており、改革に積極的に取り組んでいる。特に、組織の規模が大きい中で、6つの室及び「国際交流推進本部」を設置するとともに、事務組織や委員会をスリム化、合理化して大学全体をとりまとめ、効率的な運営が図られていることは評価できる。また、重点配分経費、教員雇用の全学的管理枠の設置・活用により、例えば、社会連携教育活動の拠点として、大阪大学発祥の地である大阪市中之島に「中之島センター」を設置するなど、総長の主導による施策が展開されている。

大学による部局評価、教職員の業績評価のシステム構築等、自己点検評価に関する取り組みも積極的に行われている。

教育面においては、教養教育と学部教育の密接な連携を図り、高等学校教育と大学教育の調査研究を行うため、「大学教育実践センター」を設置し、共通教育の全学実施体制が整備されているほか、学生相談室の設置、オフィスアワーの設定等、学生サービスの向上に努めている。

研究面においては、産学連携体制の整備、教育研究の進展に応じて組織見直しを実施する時限が設定された研究施設の整備等、活性化に向けた積極的な対応が行われている。

このように、一部には制度化が図られたばかりの試行段階の項目もあるが、先進性と熱意を持って前向きに改革に取り組み、全体としてかなり高いレベルで進展していることから、今後大いに期待される。

全部局を対象に達成状況評価を実施

9月から11月にかけて、部局に対する達成状況評価を実施します。達成状況評価は、部局には新たな文書の提出を求めず、4月に提出された部局達成状況評価シートを用いて、評価・広報室において達成状況評価書（コメント）を作成することにより行います。

コメントは、教育、研究、その他の下に設けた小項目ごとに、平成16年度実績で特に努力が見られる点や根拠データの整備状況、平成16年度実績と平成17年度計画との整合性、中期計画の達成に向けての観点から行います。

11月下旬には評価結果を送付する予定ですので、各部局におかれては、平成17年度計画の推進及び平成18年度計画の策定に活用いただけるよう考えています。

教員基礎データ一括登録システムの運用開始

教員基礎データのデータ項目のうち、「委員会」、「共同研究、外部資金」及び「寄附」の項目については、部局で一括して所属教員のすべてのデータを持っていることから、効率よく正確なデータを収集することができるよう、これらの項目については、一括してデータを登録するシステムを開発し運用を開始しました。

また、教員基礎データの入力・更新を積極的に進めていただくよう各部局に依頼しました。

阪大Nowのリニューアル

今日のインターネット社会にあっては情報に対する読者のニーズも大きく変化しています。つまり、「過去の情報よりも将来の情報」を提供するという広報姿勢が求められています。これまでの阪大Nowは、学内の出来事を記録して残すということに重点が置かれていました。このため、新しい情報提供、読者を意識した広報という視点は欠けていたように思われます。

すでに、皆さんはご覧になっていると思いますが、今回のリニューアルでは、こういった点を全面的に見直し、タイムリーな記事をより読みやすく、読者のニーズに応える紙面づくりを心がけ、8月号から全ページカラーにしました。



情報コーナーの設置

阪大の情報を積極的に提供するため、学外者の利用も多いレストラン「ラ・シェーナ」(工学研究科GSE コモン15階)とレストラン「ミネルバ」(銀杏会館2階)に、情報コーナーを設置し、阪大ニューズレター、大学案内、プロフィール、阪大Now等を提供しています。



レストラン ラ・シェーナ



レストラン ミネルバ

財務・会計室

平成16事業年度財務諸表

平成16事業年度財務諸表については、文部科学大臣の承認を得ましたので、本学の公式HPにおいて財務諸表等を公表しています。

ただし、財務諸表中の利益の処分に関する書類(案)については、現在財務大臣との協議が継続中です。

平成17年度大阪大学資金運用

本学では、平成16年度から余裕資金の一部(40億円)で国債、地方債を購入し、資金運用を開始しています。平成17年度には、更なる効率的な資金運用を図るために資金の推移等を考慮しながら、国債、地方債などの追加購入や新たに短期運用を行うことを検討しています。

平成18年度以降の予算配分の在り方等

8月末に財務省に本学の平成18年度収入・支出概算要求書が提出され、平成18年度の財政状況がある程度見込まれる状況となっています。

このため、具体的に予算配分方式の策定などの検討を進めることとしています。

人事労務室

「特例看護職員の給与及び退職手当に関する規程」の制定

優秀な看護師等の確保を図るとともに、ライフスタイルの多様化に応じた給与制度に対する職員のニーズに応えることができるよう、来年度から、附属病院の新規採用の看護師を中心に新しく「特別賞与制度」を導入することとしました。

特別賞与制度対象の看護師等として採用された方々の特別賞与額は、各期12万5千円（年間25万円）を予定しています。一方、これらの方々には、退職手当は支給しないこととしています。

この制度は、大学の独自財源によるものであり、現時点では、107名の枠内で実施することとしています。

（平成18年4月1日実施）

国際交流推進本部

国際企画室の設置

大阪大学は文部科学省から公募のありました「大学国際戦略本部強化事業」に応募し、採択されたことは、すでにお知らせした通りであります。この10月1日に事業の中核となる「国際企画室」を立ち上げました。

この企画室は、国際交流推進本部の下に置かれます。国際交流推進本部が大阪大学の国際交流の基本方針を企画・立案するのに対し、国際企画室は、その実働部隊ともいえるべきものです。企画室の業務としては、大きく3つを考えています。

第1は、情報収集に基づく研究交流の推進です。これには本学における研究交流の現状分析を行い、それに基づき研究交流の一層の推進を図る方策を考えます。本学の国際交流は個々には盛んであるが、全体的統一に欠けているという評価を受けています。全体像を掴むことにより、戦略性を高めて生きたいと考えます。他大学・他国の交流活動状況の情報収集も重要です。EU諸国、中国、韓国が学生・研究者の交流に極めて積極的であり、それを知ることは、私たちにとって大いに参考になるでしょう。

第2は、大阪大学の海外拠点活動の支援です。来年度は、大阪大学サンフランシスコ・オフィスを中心に、「大阪大学フォーラム2006」を行う予定です。また、オランダのグローニンゲン・オフィスでは、この10月下旬に開所式を行い、それに引き続き、グローニンゲン大学との共同シンポジウムを行います。また、タイ国バンコクには、生物工学国際交流センターに加えて、微生物病研究所が海外研究拠点を設置しました。これらの海外オフィスを通じて米・欧・アジアにおける大阪大学のプレゼンスを高めていこうと考えています。

第3に、大阪大学に来る海外からの学生や研究者の生活・研究環境の整備・改善をしなければなりません。その1つとして、海外からの学生・研究者が来学初期に受けるべきサービスの一元化を図るワンストップ・サービスの検討を始めたいと考えています。

国際企画室は、国際交流推進本部長が室長となり、専任室員として石川真由美特任助教授を採用しました。そのほか、特任研究員とリサーチアシスタントが、直接業務に当たります。企画室はICホールの4階に設置されています。国際交流に関するアイデアが、全学から企画室に寄せられることを期待しています。

キャンパス・エコロジー

工学研究科教授 盛岡 通

大阪大学のキャンパスは人をお迎えするのにふさわしいでしょうか。来客があるときに教員はいつも思う。建物群の改築が進み、いわゆる福利厚生施設が整ってきたので、もう少し個性やゆとりのあるキャンパスにならないだろうかという問いかけです。学生からは自由なたまり場が欲しいという声がいつの時代も聞こえてきます。ライフスタイルも変わったので、キャンパスにはバイクや車が多くなる一方で、留学生や社会人、多様な職種の関係者の増加に対応して、整備のあり方にもこれまでと少し趣の違う面が強調されてきました。それは多文化共生、男女共同参画とか、防災セキュリティ、情報セキュリティ、ユニバーサルデザイン、それに治安・保安のセーフティ・マネジメント、といった「社会組織であるなら当然取り組むべきこと」によるやく目が向いてきたということです。

ここで言うキャンパス・エコロジーもまた、そういった大学キャンパスが備えることが望まれている「環境の質」のひとつです。一つのタウンとも言うべき大学キャンパスができあがってゆく過程で、自然の土地は改変され、市街地としての整備がなされ、緑豊かで建物や道の整った景観が形成されていく。同時に、滞在人口で一万人から数万人の人々が何らかのかかわりを持つことから、その消費するエネルギーや廃棄物、交通量は大きなものになります。しかも、実験器具や学術活動の消耗品は多様なだけに、それをきちんと扱うのは企業なら当たり前ののだが、これまでは「社会の風の弱かったのかな」学園では、教育・啓発から取り組む必要がでできます。

大学キャンパスでこういった環境・エコロジー分野での取り組みは、学生や生協のグループがまず手がけたという色彩が強いでしょう。例えば、食堂の生ごみの堆肥化実験、

機密書類の回収資源化、それにキャンパス内のペットボトルのデポジット実施などは、新鮮な発想と企画と行動力が必要であり、これまでの規則に縛られたやり方では実現はおぼつきません。また、平成17年度から、総長裁量経費で学生グループの提案を採択して、学生らのアイデアを活かそうという制度も運用されています。その中にはキャンパスにシンボルとしての花壇と時計を組み合わせた「花時計」やハンガー方式の立体花壇の試みも含まれています。それらは、豊中キャンパスの刀根山の西門の庭園に続いて、吹田キャンパスの千里門周りの整備へとつながっているのです。これからは風景としても生き物の空間としても水辺や森が求められます。



大阪大学生協ホームページより引用



大阪大学生協ホームページより引用

このように、キャンパス・エコロジーには、もう少し深みのある分野（ディープ・エコロジーという）があります。大学は温室効果ガスの削減に関係ないというわけにはゆきません。電気や都市ガス等のエネルギーの消費量など（正確に環境負荷という）を削減しながら、学術機能を発揮してゆくという環境経営の側面があり、それは企業組織等では「環境マネジメント」として実践されています。いくつかの大学ではそれを積極的に取り組んでいます。まだまだそれは副次的なことだと解釈する傾向が残っています。また、キャンパスは丘陵部を切り開いてできていますので、北摂の自然の残りがあちこちにあり、それと共存・共生してゆくことも求められるようになりました。島熊山の森の保全運動はキャンパスとも無縁ではありません。

さらに、大学の学術面から見ても放置できないのは、社会的存在である大学が地域や社会に果たしてゆく役割を広く捉えることについてです。環境面では国立大学法人も日頃からの省エネやごみリサイクルの取り組みなどをまとめて環境報告書として公表することが要請されていて、それが企業では環境・社会報告書へと拡大しつつあることに注意すべきでしょう。大学の組織評価にはよく研究、教育、

社会貢献、それに管理運営という分野区分が使われますが、「環境」の概念はこれらを横つなぎで展開する方向が望まれています。もちろん、サステナビリティを獲得する第一級の研究や深い専門教育が評価にとって重要ですが、他方で、人間と地球の行方を洞察し、市民として賢く振舞える行動力を養うことも大事です。キャンパスはそういった意識を涵養し、そして小宇宙として、人々の環境行動を誘うものであってほしいのです。USR（大学の社会的責任、University Social Responsibility）の枠組みのなかで、環境保全への取り組み、環境技術や制度の開発、それに人間力を養う環境教育の推進などが試みられる時代です。大阪大学らしい自発的で前向きな動きを生み出したいものです。

● 機密書類回収実績

年度	処理箱数	処理重量
2002年	2094箱	34,265kg
2003年	2119箱	30,875kg
2004年	3104箱	43,358kg

毎月1回豊中/吹田地区 各部局から排出段ボールを回収
龍野市にある再生工場へ運搬（トイレトーパーパーの原料として再利用）

● デポジット制による飲料容器の回収

【ペットボトル】

年 度	販売数量	回収数量	回収率
2002年	485,963本	161,496本	33%
2003年	456,513本	191,852本	42%
2004年	455,756本	228,780本	50%

【紙コップ】

年 度	販売数量	回収数量	回収率
2002年	95,781個	81,183個	85%
2003年	77,023個	70,084個	91%
2004年	78,049個	71,456個	92%

※ データは、大阪大学生協

トゥールーズ第1大学(フランス)と大学院法学研究科・法学部ならびに 大学院高等司法研究科が学術交流協定を締結

6月23日(木)、大学院法学研究科・法学部と大学院高等司法研究科は、法経大学院総合研究棟の4階大会議室において、フランスのトゥールーズ第1大学と学術交流協定を締結しました。トゥールーズ大学は1229年に創設され、パリ大学やオックスフォード大学そしてボローニャ大学とならぶ世界で最も古い大学の一つです。トゥールーズ大学は1969年に専門分野ごとに3つの大学といくつかの研究機関に再編されましたが、法学部を中心とした社会科学系の研究教育機関として創設されたのがトゥールーズ第1大学であり、同大学は、現在、764名の教職員と約1万8千人の学生(その内の約9%が留学生である)をかかえるフランスでも有数の大学です。

交流協定の調印式には、トゥールーズ第1大学からアンリ・ルスィオン学長と同学長夫人、国際交流委員長のジャン・ピエール・テロン教授とマリヴォンヌ・テロン教授、法学部長のベルナル・ベニエ教授、そして国際交流日本担当のジャック・ラリュエ教授とクロディーヌ・ラリュエ弁護士との7名が、本学からは、三成賢次大学院法学研究科長と吉本健一大学院高等司法研究科長をはじめ松川正毅大学院高等司法研究科教授、島岡まな同助教授、そして長田真里と幡野弘樹の両法学研究科助教授が出席しました。



トゥールーズ第1大学(フランス)と大学院法学研究科・法学部
ならびに大学院高等司法研究科との学術交流協定調印式

調印式後の懇談では、交流協定に基づき、今後、法学及び政治学の分野における教員と学生の学術交流をいっそう積極的に推進していくこと、そして相互交流を実りあるものとするために共同研究テーマを協議のもとに策定し、両者の研究連携を具体化していくことなどが確認されました。

さらに続いて、著名な先生方が来日されたこの機会を利用して、「フランス法の現在」と題した特別講演会を開催しました。講演会では、最初にルスィオン学長から挨拶があり、続いて、J. P. テロン教授「フランスにおける人権の生成」、M. テロン教授「フランスにおける経済統制に関する訴訟」、ベニエ教授「西欧における安楽死の問題」、ラリュエ教授「労働者の発明」の各講演が行われました。それぞれの講演はフランス法の各法分野の最新動向を簡潔に伝える非常に興味深いものであり、教員・学生にとってはまさに現在のフランス法を知る絶好の機会となりました。



講演会「フランス法の現在」で挨拶するルスィオン学長

翌24日には、ルスィオン学長一行は宮原秀夫総長と橋本日出男理事(国際交流推進本部長)を表敬訪問し、日仏の学術文化交流などについて歓談をされました。その後、一行は、大阪、京都、奈良を訪れ、さらに高野山にも足をのばして日本の歴史と文化を堪能し、短期間ではあったが日本のすばらしい思い出ができたとの感謝の言葉を残し、6月30日にトゥールーズへの帰路につかれました。

(大学院法学研究科・法学部、大学院高等司法研究科)

「医療事故防止及び個人情報保護に関する講演会」開催

歯学部附属病院では、7月22日(金)午後5時30分から、D棟大講義室において教職員及び学生等を対象に、本年度第1回目の医療事故防止に関する講演会を、個人情報の保護の問題も内容に含めて開催しました。

当日は、恵比須繁之歯学部附属病院長の趣旨説明の後、埼玉県社会福祉事業団そうか光生園医長の加藤仁資先生により「医療で心得ておくべき法律の考え方」と題して講演が行われ、医療裁判の過去の判例を基にした法律の考え方について、個人情報保護の問題を含め水準の高い実りある話がなされ、参加者約230名は熱心に聞き入っていました。

講演後、参加者からは医療に関わる法律問題について得るものが多かったとの声が多く好評でした。

(歯学部附属病院)



歯学部附属病院において平成18年度医員(研修歯科医)採用説明会と協力型臨床研修施設の募集等に関する説明会を開催

8月6日(土)に歯学部において、医員(研修歯科医)採用に関する説明会と協力型臨床研修施設の募集に関する説明会が開催されました。

これらは、平成18年度から始まる歯科医師臨床研修必修化に向けて、歯科医師臨床研修制度について内外の関係者の理解と協力を得るため、今年度初めて実施したものです。

正午からの病院見学のあとに行われた採用に関する説明会では、歯科医師国家試験受験予定者である学内外の学生等約170名が集まり、歯学部附属病院の臨床研修プログラム責任者・野首孝祠教授から、歯科医師臨床研修の概要、歯学部附属病院の臨床研修プログラム、研修希望者と研修施設とのマッチング等について詳しい説明が行われました。

途中、折からの落雷による会場停電というアクシデントに見舞われましたが、質疑応答では暗闇の中にもかかわらずカリキュラム等について活発な質問がなされ、学生による関心の高さが窺われました。



そのあと引き続き行われた協力型臨床研修施設の募集に関する説明会では、歯学部附属病院の複合型臨床研修プログラムにおいて協力型施設としての情報収集のため参加された歯科医院・診療所関係者約30名に対して、同じく歯科医師臨床研修の概要、歯学部附属病院の臨床研修プログラム、協力型臨床研修施設の基準等について説明がなされ、優秀な研修歯科医の受け入れを望む歯科医院・診療所関係者との間で活発な質疑応答が行われ、研修歯科医と同様に高い関心が伝わってきました。

歯学部附属病院では、秋にも第2回目の医員(研修歯科医)採用に関する説明会を予定しており、またホームページ等においても引き続き歯科医師臨床研修について情報を提供してゆく予定です。

(歯学部附属病院)



平成17年度(第27回)基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」開催

基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」が、8月8日(月)～11日(木)の4日間にわたり、基礎工学部国際棟(シグマホール)において開催されました。

今年で27回を数える本講座は、基礎工学部からの情報発信の一環として1979年から毎年開催されており、地域社会と大学との連携を深めるための重要な役割を担っています。

今回は、大学院基礎工学研究科、大学院情報科学研究科及び極限科学研究センターの教員9名が、画像や動画を駆使し、自らの研究成果や科学技術について分かりやすく講義を行いました。また、講義終了後に実施した研究室見学も大変好評でした。

高校生から80代以上の方まで、137名の参加者が熱心に講義に取り組み、4日間の公開講座は盛況のうちに終了しました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)



講義の様子



研究室見学の様子

平成17年度大学説明会(オープンキャンパス)に9,400人余が参加

8月17日(水)から24日(水)の間、学部別に日程を分けて大学説明会(オープンキャンパス)を開催しました。

例年文科系4学部、理科系3学部及び医歯薬系3学部のグループに分けて、同一グループ内で日程が重ならないよう調整し、参加希望者が複数の学部を見学できるように工夫しています。参加者数は年々増加傾向にあり、9,421人が集いました。(前年比1,888人増)

各学部では、学部・学科の内容紹介、入試概要の説明、大学及び学部紹介DVDの上映、研究室見学・模擬授業及び個別相談コーナーなど多彩な内容で実施し、参加者には大変好評でした。

(学生部入試課)



工学部説明会会場で熱心に聞き入る参加者

大学院理学研究科物理学専攻東京入試を実施

大学院理学研究科物理学専攻では、平成18年度の大学院前期（修士）課程の入試を8月23日（火）に東京のキャンパスイノベーションセンターで実施しました。

物理学専攻では世界で競争する最先端の研究が行われています。大学院での教育は研究と深く関係しています。大学の物理学科の講義は大学が異なっても、内容的には全世界共通の部分がかなりあります。しかし、大学院での研究は一見同じ言葉で括られても具体的な研究内容は、大学間というより研究室毎に大きく異なります。大学院での学生の研究や勉学のモチベーションは、自分の興味と一致すれば大きく高まります。物理学専攻はこういった観点から出来るだけ多くの学生に受験の機会を与え、出来るだけ興味の一貫する学生に来て欲しいと考えました。東京は日本で最大の学生のマーケットでもあるので、平成18年度入学から東京での入試を行なうことにしました。

東京入試の実施に向けてまず会場探しから始めました。試験会場の他に事務局が必要になりますので、阪大のサテライトオフィスのある学生会館とキャンパスイノベーションセンターに絞って調査しました。どちらも便利な場所にあり、阪大のオフィスも立派なものでしたが、受験の会場という機能性に優れ、ネットワーク等の設備が完備している点からキャンパスイノベーションセンターで行なう事に決めました。キャンパスイノベーションセンターは山手線の田町駅を降りてすぐの非常に便利で目立つ所にあります。

一方で、面接試験は大阪で行なう事にしました。多くの面接官が東京まで行くのは大変であるという理由もありますが、合格する前に自分が将来研究する場所を見ておく必要はあるだろうと考えてのことです。また受験者の便宜をはかることも重要な視点です。筆記試験と面接試験を日程的に離しましたので、東京に住む学生は筆記試験に受かった時だけ大阪に行けばよい事になり、時間的な負担が大きく軽減されることになりました。

試験当日、実施委員として岸本、山中、野末の3名の教授と、事務から取材を兼ねて三神、千鳥、石田の3名が参加しました。なんといってもセキュリティに最大の注意を払い行動したことは言うまでもありません。

前日に試験会場を確認し、そこへの案内板などを設置して翌朝に備えました。会場は非常に分かりやすい作りになっていて、受験生が会場に来る上での混乱は全くありませんでした。しかし、ちょうど同じ日に北海道大学の生命関

係の大学院入試も行なわれており、そちらの案内板の方が大きく目立ちました。我々が始めて行なった学外の大学院入試の同日に他大学と鉢合わせと言う事実は、今後こういったことが増えていくのではと思わせるに十分でした。

応募者は19名で受験者が16名でした。筆記で13名が合格となり、面接試験に進む事になりました。その発表は2日後の25日（木）にキャンパスイノベーションセンターと阪大理学研究科で掲示しました。その他に今回初めてホームページでの発表も行ないました。最後の面接は8月29日（月）に大阪で行ない、最終的に8名が合格になりました。



キャンパスイノベーションセンターの試験会場受験生に問題を配布している風景

初めての試みでしたので、受験生にアンケートに答えて貰いました。運営等に関しては私たちも十分注意を払って行ないましたので、概ね好評でした。来年度の受験生のためには是非ともやって欲しいという意見が大半でした。一方、この試験がある事をどうやって知ったかとの問いには、阪大のホームページを見て知った人と、友人から教えて貰った人に大別できました。逆に言うと一般の受験生はほとんど知る機会が無かった事になります。

東京で試験を行なうことで、今まで阪大を受けた事が無かった大学からの応募がありました。また何人か関西の大学の受験生が居て、日程が重視されている点も分かりました。一方では準備期間が短く、十分周知させられなかったことは反省材料です。これらを改善し、来年は更に大きく発展させていきたいと考えています。

（大学院理学研究科・理学部）

タイ王国保健省医科学局との大学間学術交流協定を締結

8月29日(月)、タイ王国の保健省医科学局との大学間学術交流協定調印式がタイのPathumwan Princess Hotelにおいて行われました。調印式では宮原秀夫総長と Warachit Pajit 保健省医科学局長とがそれぞれ協定書に署名し、今後の交流進展を相互に確認して交換されました。この調印式にはこれまで交流促進に大きな役割を果たしてきた微生物病研究所の木下タロウ所長始め関係者が陪席しました。また、引き続き開催された祝賀会及び「新興再興感染症に関する日本 - タイ共同研究センター - 発足祝賀会」においては、在タイ王国日本国時野谷敦全権大使、マヒドン大学 Pornchai Matangkasombut 総長を初め多くの来賓からの祝辞がありました。

このたびの協定に当たっては、タイ王国保健省医科学局と微生物病研究所との部局間交流協定を基礎に、医学系研究科、薬学研究科などからの交流実績を踏まえて、今後の

交流発展を図るため、大学間学術交流協定とすることとされたものです。

(研究推進・国際部国際交流課)



調印後、宮原秀夫総長と Warachit Pajit 保健省医科学局長を中心に参加者一同

平成17年度「大学の国際化推進のためのFDワークショップー教育の国際標準を学ぶー」実施

昨年度(平成16年度)に引き続き、今年度も大学の国際化推進のためのFD関連事業を実施しました。この企画にあたり学内関係者によるFD実施委員会を構成し、留学生センターと大学教育実践センターが共催しました。講師には、昨年本学でのFDワークショップの講師として非常に高い評価を得た Denis Berthiaume 氏(昨年は本学協定校カナダ McGill University 講師、今年は英国 Southampton

大学に異動)を再びお招きしました。

8月31日(木)午後には昨年度FDワークショップ参加教員対象の「FDフォローアップセミナー」を行い、9月1日(金)午後はコンベンションセンターにてFDセミナー「大阪大学における教育の国際化を目指す - FDの取り組みを通して -」を実施しました。このFDセミナーでは Berthiaume 氏による講演と、昨年のFDワークショップ参加の先生方3名、原田英光助教授(歯学研究科)、馬越大助教授(基礎工学研究科)、瀬戸山晃一講師(法学研究科)によるパネルディスカッションを行い、「学習者中心のアプローチ」の理論・実践について学ぶとともに、FDを実施していく上での今後の課題について意見交換しました。このセミナーには学内外から約30名の参加者がありました。

9月5日(月) - 9日(金)は大学教育実践センター大会議室にて講義実習を含む短期集中のFDワークショップを実施しました。参加教員は7名と少なかったですが、今年度の参加者からも高い評価を得ました。「・・・本当に考え方を180度転換させられたといっても言い過ぎではないと思います。」(今年の参加者の感想から)

(留学生センター)



FDセミナーでの講演風景

アーヘン工科大学(ドイツ連邦共和国)との大学間学術交流協定を締結

ドイツ連邦共和国のアーヘン工科大学 (RWTH Aachen University http://www.zhv.rwth-aachen.de/zentral/english_index.) Burkhard Rauhut 学長が本学との大学間学術交流協定締結



調印後、協定書を取り交わす
Burkhard Rauhut アーヘン工科大学長と宮原総長

のため9月5日(月)来学されました。Burkhard Rauhut 学長と宮原秀夫総長による調印式は、総長室において、橋本日出男理事、辻穀一郎総長補佐、ドイツ総領事館エルケ・ティート副総領事 (Ms. Elke Tiet) の陪席のもと行われました。

同大学とは、大学院基礎工学研究科、産業科学研究所、接合科学研究所による部局間交流協定等による交流実績を踏まえて、大学間交流協定とすることとされたものです。

調印式後、コンベンションセンターにおいて、Burkhard Rauhut 学長による特別講演会 “RWTH Aachen University-Recent Developments and Strategic Planning” (アーヘン工科大学 - 近年の発展と戦略構想) が開催され、参加した教員、学生からアーヘン工科大学での留学生受け入れ体制等について活発な質疑応答がありました。

(研究推進・国際部国際交流課)

大学院生命機能研究科が研究交流会を開催

平成14年度に発足した大学院生命機能研究科は、多様な研究領域間の融合を目指しており、その一助とするため、毎年研究交流会を開催しています。今年度は、9月6日(火) 午後に銀杏会館で開催しました。この会には、研究現場の雰囲気を感じてもらえるよう、来年度入学予定者(入試合格者)にも招待状を出していますが、当日は台風14号の接近で荒天となり、参加者が激減するのではないかと心配されました。しかしそれは杞憂で、大勢の方々の参加がえられました。

平野俊夫研究科長の、研究を登山の難しさと楽しさになぞらえた開会の講話のあと、12研究室の若手による研究室の活動紹介があり、夕刻からはポスター発表が行われました。このポスターは、各研究室の最新の研究成果を、専門学会で同分野の人にアピールするのではなく、他分野の人に分かりやすく伝えるという趣旨のもので、最後に投票でベストポスター賞を選ぶ趣向としました。

実費販売のドリンクを片手に、熱のこもったアピールとディスカッションが午後8時ころまで続き(写真)、大いに盛り上がる会となりました。

(大学院生命機能研究科)



平野研究科長の開会あいさつ



ポスター発表の様子

教職員懇親会開催

毎夏の恒例行事である教職員懇親会が9月7日(水)にアサヒビール株式会社吹田工場ゲストハウスで開催されました。この懇親会には、本学から宮原秀夫総長、鈴木 直理事・副学長、仁科一彦理事・副学長、二瓶文博監事の他、名誉教授、各部局長、退職事務職員及び教職員が、また、アサヒビール株式会社からは福地茂雄代表取締役会長以下関係者が出席しました。

当日は、福地代表取締役会長、宮原総長の挨拶に続き、熊谷信昭元総長が、今回で第55回目を迎える懇親会の乾杯を行いました。

懇親会では、抽選会が催されるなど、終始和やかな雰囲気の中、出席者が互いの旧交を温め合い、盛会裡に終了しました。

(総務部総務課)



総長の挨拶



熊谷元総長の乾杯

慶尚大学校(大韓民国)との大学間学術交流協定を締結

9月9日(金)大韓民国の慶尚大学校(Gyeongsang National University <http://www.gsnu.ac.kr>)において、CHO Moo Je 学長と宮原秀夫総長による大学間学術交流協定調印式が挙行されました。調印式には慶尚大学校と部局間交流を継続してきた部局から豊田政男大学院工学研究科長、中嶋英雄産業科学研究所教授が陪席し、同大学校からは各部局長の陪席がありました。

同大学とは、工学研究科及び産業科学研究所との部局間交流協定を基礎に、このたび、相互の交流発展をめざして、大学間交流協定とすることとされたものです。

調印式後、同大学校南冥館において、宮原総長の英語による特別講演「Communication Design Competency」が開催され、多数の学生・研究者が熱心に聴講しました。

(研究推進・国際部国際交流課)



調印後、協定書を取り交わす宮原秀夫総長と
CHO Moo Je 慶尚大学校学長

事務職員対象の産学連携・特許講習会を開催

知的財産本部では、9月13日(火)から11月8日(火)まで産学連携・特許事務講習会(初級編・前期)を実施しています。この講習会は、産学連携・特許に関する事務を担当する事務職員に必要とされる知識・技能(法律、制度等)の修得、向上を目的として昨年度から実施されており、今回は知的財産法に関し、知的財産検定2級(実施:知的財産教育協会、後援:日本弁理士会)レベルの講義、演習、修了試験が行われます。

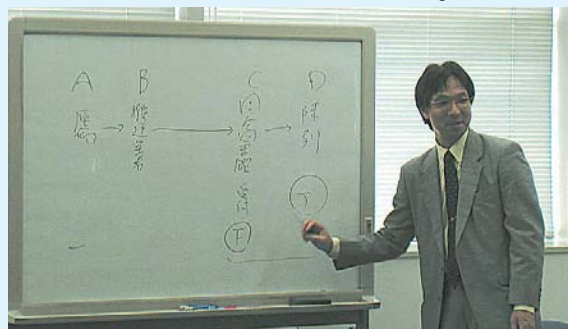
まず、9月13日(火)、14日(水)には、河野特許事務所の福永正也弁理士を講師に迎えて、産業財産権四法(特許法、実用新案法、意匠法、商標法)、著作権法、不正競争防止法について、小テストを挟みながら講義が行われました。

講義は、随時、講師と受講者の間での質疑応答を交えてインタラクティブに進められ、受講者は集中して聞き入っていました。

今後、10月31日(月)には、検定に即した形式での演習を受けた後、11月8日(火)には、全員が修了試験として知的財産検定2級を団体受験することとなります。

同本部では、引き続き、受託・共同研究契約、兼業、利益相反等をテーマとした講習会を実施する予定です。

(知的財産本部)



平成17年度基礎工学研究科英語カリキュラム修了式挙行

英語による科目履修及び研究指導により修士号を取得できる基礎工学研究科英語カリキュラム博士前期課程第1期

生の修了式が、9月14日(水)に基礎工学部A棟2階会議室において挙行されました。



式では、関係者24名が出席し、英語カリキュラムWG主査である田谷正仁大学院基礎工学研究科副研究科長の司会のもと、西田正吾大学院基礎工学研究科長から式辞があり、平成15年10月に入学した第1期生7名によるスピーチを行いました。最後に、出席した基礎工学研究科執行部、各指導教員、英語カリキュラムWGメンバーとともに記念写真を撮影し、終了しました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

「大阪大学総合学術博物館 第4回企画展」開催

総合学術博物館では、9月18日(日)から25日(日)までの8日間、大阪大学中之島センターにおいて第4回企画展を開催いたしました。今年はアインシュタインの3大論文が発表された1905年から100年目にあたることを記念した世界物理年ということもあり、「時空のなぞ - アインシュタイン・イヤーによせて - 」というメインテーマのもと、学内の公募によって選ばれた15チームによる教育研究紹介の展示ブースと15名の講師によるミニレクチャーを行いました。

パネル展示では、担当した教職員や大学院生による説明が見学者の皆様大変好評でした。また、昨年に引き続き、宮原総長によるミニレクチャー「デジタル情報通信」を皮切りに、文理あわせて15のミニレクチャーを行いました。いずれのレクチャーにおいても会場がほぼ満席となり、大変好評を博しました。また、今回は大阪市立科学館との共催事業として「親子科学教室」を開催しました。



笠井工作センター長の説明を聞く宮原総長



藩札（故作道洋太郎 本学名誉教授遺贈資料）
展示を熱心に見学する来観者



錯覚の不思議を体験する来観者



ミニレクチャー風景

8日間の開催期間中にのべ約2200名の観覧者においていただき、「展示もわかりやすく、説明も良く最高でした」とか「これからもこういう企画を増やし、一般的に受講できる機会を作って欲しい」という来館者からの声が多数寄せられました。総合学術博物館では、第5回企画展も来年9月に中之島センターで開催する予定です。

なお、この第4回企画展の概要とミニレクチャーの様子は、総合学術博物館のホームページ（<http://www.museum.osaka-u.ac.jp>）で公開しています。

（総合学術博物館）

「教育における質保証」に関するフィンランド使節団との交流セミナーを開催

大学院工学研究科では、標記使節団を迎えて、9月20日（火）午前9:45 - 12:15、GSE - コモン - イースト5階第2会議室において国際交流セミナーを開催しました。団長はテンペレ大学で高等教育およびその質保証（Quality Assurance）を研究し、3年前に退職したパルジャーネン（Matti Parjanen）名誉教授でした。毎年1回、教育における質保証をテーマとし、これまで8回使節団を組んで世界各国を訪問してきましたが、今年は日本を訪問することになりました。視察団はフィンランド各地の大学の学長、副学長、学部長、専攻長など25名でした。

セミナーでは、豊田政男大学院工学研究科長が歓迎の言葉を述べると共に、これまで十数回訪れたフィンランドとの交流のこと、日本とフィンランドの日露戦争以来の緊密な関係や、よく似た発音の言葉が多いことなど、二国間の特別な関係について紹介されました。そのあと、パルジャーネン名誉教授が使節団を代表して挨拶し、工学研究科側の講演に入りました。

大学教育実践センターの秦由美子助教授の司会で、大学院におけるPBL教育の実践例（南埜宜俊教授）、大学院博士後期課程の研究課題企画ゼミナール（桑畑進教授）、工

学研究科の評価システム（甲斐泰教授）、携帯電話を利用した授業アンケートシステム（掛下知行教授）、若い教職員・学生の能力向上プログラム（池田雅夫教授）などについて講演が行われました。大学（University）と工科大学（Polytechnic）からほぼ半数ずつの参加者であったため、工学研究科と共通の取り組みや問題点なども多く、活発な討論が行われました。（大学院工学研究科・工学部）



前列左から秦助教授、豊田研究科長、Parjanen 使節団長、甲斐教授、桑畑教授

産業科学研究所がセクシュアル・ハラスメント防止等講習会を開催

産業科学研究所では、セクシュアル・ハラスメント防止等に関する講習会を、9月22日（木）に講堂において開催しました。

この講習会は、セクシュアル・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントを防止し、当研究所の全構成員にとって快適で望ましい教育研究環境を作り上げていくことを目的としたもので、教職員・大学院学生等、約60名が出席しました。

産業科学研究所セクシュアル・ハラスメント防止対策委員会委員長の谷澤克行教授の司会進行により行われ、最初に川合知二所長の挨拶があり、講師としてお招きした俣クオレ・シー・キューブ代表取締役の岡田康子氏から「学内

におけるハラスメント防止のために」と題して、約1時間50分の講演が行われました。

講師の岡田康子氏は、最近の企業等で大きな問題となってきた「パワー・ハラスメント」という言葉を造語された方で、俣クオレ・シー・キューブを設立して、企業の社員とその家族のためのメンタルヘルス電話相談サービス、セクシュアル・ハラスメントの社外相談サービスなどを行ってられます。その一方で、パワハラに関する実態調査や研究を行うとともに、「許すなパワーハラスメント」（飛鳥新社）や「上司殿！それはパワハラです」（日本経済新聞社）など、多くの著述を通じて、パワーハラスメント防止のための啓蒙活動を続けてられます。

講演では、セクシュアル・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントは、それらが起こる背景に基づけば、パワーハラスメントに大部分が含まれること、セクシュアル・ハラスメントは自覚度別に分類できること、パワハラの特徴と判定基準など、多くの実例を交えながら非常に分かりやすく解説されました。また、種々のハラスメントを未然に防止するために、大学人としてどのように行動すべきか常に自覚することの必要性について述べられました。講演終了後には、熱心な質疑応答もあり、好評のうちに終了しました。（産業科学研究所）



講演会「研究評価について - 日本とイギリス - 」

9月26日(月) 13:30 - 15:30、工学部U2 - 312教室において、101名の参加者の下に標記講演会が開催されました。工学研究科では、昨年度独自の評価システムを構築しその試行を行いました、その過程で特に研究評価について議論が高まり、すべての教員の関心事ともなっています。講演会では、最近出版された「新時代を切り拓く大学評価 日本とイギリス」(東信堂)の編著者である大学教育実践センターの秦由美子先生と、やはり著者のお一人の国立教育政策研究所高等教育研究部部長の塚原修一先生に講師をお願いしました。秦先生には、「イギリスの大学における研究評価」と題して、イギリスの大学改革の歴史的背景と具体的手法、その経緯の中で研究評価はどう位置づけられ具体的にどう評価されたのか、その結果イギリスの



左から甲斐教授、塚原先生、秦先生、長谷川教授、掛下教授

大学はどう変わったのかについてお話をいただきました。また塚原先生には「日本の大学における研究評価」をテーマに、日本の大学改革の経

緯と今後について、またその中で研究評価はどのように捉えられ実施されようとしているのか、についてお話いただきました。

秦先生の講演

では、イギリスの大学の研究評価(RAE)によって、発表論文数が増え、研究費や研究環境が改善され、研究活動が活性化され、社会への説明責任も果たせたが、反面、研究大学と教育大学の分化の促進、教育の軽視、外部資金導入強化、評価の低い学部・学科の閉鎖・統合、大学間統合による大学大規模化がもたらされた、と説明されました。

塚原先生の講演では、研究評価はピア・レビュー(同僚評価)と科学量計学によるのが一般的だが、ピア・レビューでは評価者の発見と育成、世代交代が重要な課題であり、また科学量計学では、客観性が特徴ではあるが、研究者の論文執筆行動や引用行動が標準化されておらず、分野間比較は困難で、追跡的方法がもっとも適していると説明されました。(大学院工学研究科・工学部)



秦先生の講演風景

防災訓練を実施

9月27日(火)15時から、学内で実際に事故が発生した場合の初期対応訓練を工学研究科、産業科学研究所、保健センター、医学部附属病院及び事務局関係部課の協力を得て吹田キャンパスで実施しました。

当日は、工学研究科と産業科学研究所で、それぞれ火災、ガス爆発事故が発生したという想定で、避難誘導、被災者救護、情報収集、対策本部の設置などのシュミレーションを行いました。模擬被災者の応急処置には保健センターの看護師があたり、医学部附属病院への搬送には民間救急車を利用しました。事務局内におかれた対策本部では、担当者が分担して被害状況の情報収集等にあたりました。

今回の訓練で見出された問題点(人員、通信手段、規程など)を整理し、危機管理体制の整備に役立てていくこととしています。

(安全衛生管理部)



模擬被災者搬送の様子

ナノ高度学際教育研究訓練プログラム(社会人再教育プログラム)の第1期生修了認定証授与式並びに特別講義、懇談会開催

ナノサイエンス・ナノテクノロジー-研究推進機構は、ナノ高度学際教育研究訓練プログラム(社会人再教育プログラム)の第1期生修了認定証授与式並びに特別講義を去る9月29日(木) 社会人受講者(1・2期生を含む。) 来賓、大学関係者等約80名の出席のもと、本学中之島センターをメイン会場として開催しました。

本事業は、科学技術振興調整費新興分野人材育成プロジェクトとして、平成16年度より20年度までの5年間の予定で文部科学省の委託事業として実施中のものであり、実社会で活躍中の研究者・技術者を対象として、1年間の講義(遠隔授業を含む)と短期実習を通してナノサイエンス・ナノテクノロジー-の現状を理解し、次世代産業に役立つ学際的知識と幅広い実践能力を身につけるための大学院レベルの研究科横断型の高度再教育プログラムです。

当日は、馬越佑吉(理事・副学長)ナノサイエンス・ナノテクノロジー-研究推進機構長から22名の受講生に対して修了認定証が授与され、同機構長より第1期生として学ばれた知識を今後各方面で是非活用してほしいとの祝辞の後、赤井久純プログラム主任(大学院理学研究科教授)より単位取得についての説明がありました。



馬越機構長から修了認定証授与風景

引き続いて、大阪大学接合科学研究所 宮本欽生教授より「スマ-トプロセスによるナノ・マイクロ構造制御とものづくり」と題した特別講義が行われました。超精密制御されたマイクロ溶接や光によるスマ-トプロセス(自由造形)が作り出す各種構造物質についての紹介に続いて、フラクタル構造型のフォトニック結晶の作製とその電磁波特性や応用について、またナノサイエンス・ナノテクノロジー-との結びつきについても分かりやすく丁寧な解説が行われ、受講生は質問を交えて熱心に聞き入っていました。



宮本教授の特別講義風景

また、講義の様子は、遠隔講義システムによって大阪大学東京オフィス、けいはんなプラザを含む学内外サテライト教室にも配信されました。

場所を移しての懇談会では、ナノサイエンス・ナノテクノロジー-企画推進室長 伊藤正教授の挨拶と乾杯に始まり、修了生、2期生、大学関係者相互の親交を深める絶好の機会となりました。



社会人再教育プログラム第1・2期生の集合写真

なお、社会人再教育第1期生は、変速的に昨秋入学でしたが、第2期生以降は春入学の1年間受講のため、早速10月3日(月)からは第2期生の後期分が中之島センター-夜間講義として月~金の週日開催されています。

(ナノサイエンス・ナノテクノロジー-研究推進機構)

大学院理学研究科・理学部環境美化実施

大学院理学研究科・理学部では、例年実施している学内環境美化の一環として、今年も9月29日(木)に理学研究科周辺の清掃を実施しました。多数の教職員・学生の参加があり、用意した700足の軍手やゴミ袋が瞬間になくなりました。

当日は、初秋とはいえ残暑の厳しい中、多数の教職員、大学院学生、学部学生及び外国人留学生等総勢約400名が一体となって約1時間にわたり、理学研究科・理学部構内を中心に豊中地区正門、大高の森付近の清掃区域で、空き缶、空き瓶、ペットボトル、タバコの吸い殻等のゴミ拾い及び除草作業等に精を出し、付近一帯が見違えるように綺麗になりました。

この清掃作業は、



副研究科長と学生の作業風景

日頃忘れがちな環境美化に対する意識を再認識するとともに、教職員・学生が快適なキャンパスライフを送れるよう、美化意識の高揚を図ることを目的として行っているものです。

作業終了後はジュース等を飲みながら歓談し、平素は教育研究の繁多にまかせてお互いに話す機会の少ない教職員、学生のコミュニケーションを深める場としても大いに役立ちました。

(大学院理学研究科・理学部)



雑木を刈り取る出口事務長

平成17年度大阪大学係長研修実施

法人となって初めての係長研修が、10月4日(火)から6日(木)までの3日間にわたってコンベンションセンターを会場として行われました。

本研修は、係長及び係長相当の職にある者に対し、その職務遂行に必要な基本的・一般的知識を修得させるとともに、監督者としての能力及び識見を確立させ、大学行政の管理運営の重要な担い手としての職員の資質の向上を図ることを目的とし、他機関への出向者(14機関23名)を含む46名が受講しました。

今回は(株)マネジメントサービスセンターのシニアコンサルタントである森隆氏を研修講師として、初日の午前中は「我々を取り巻く環境変化」「係長に求められる能力」の講義が行われ、受講者は熱心に聞き入っていました。午後からは、「総務課長のケース」と題してインバスケツト演習が行われ、限られた時間と情報の中で未決案件を処理することにより、判断力や人材活用能力などについて自己分析を行いました。

2日目の午後からは、演習「インタアクションマネジメント」が行われました。これは、コミュニケーションを通



じて部下の問題を解決し、やる気にさせ、主体的に考え行動できる人材を育成するもので、上司と部下役になりロールプレイングに討論を尽くしていました。

今回の研修で、受講生は様々な意見交換を通じて理解を深め合い、厳しい中にも和やかな雰囲気の中で3日間の日程を終え、全員所定の課程を修了しました。

(総務部人事課)

外部資金獲得に向けた「科学研究費補助金説明会」に370名が参加

科学研究費補助金の申請件数の拡大及び採択率の向上を図るため、応募予定者および事務担当職員を対象とした科学研究費補助金説明会を、去る10月6日(木)に開催しました。吹田キャンパス(午前)と豊中キャンパス(午後)の2回に分けて開催した説明会には、若手研究者、事務担当職員など計370名の参加がありました。

吹田キャンパスでは、研究推進担当の馬越佑吉理事・副学長から、科学研究費補助金への積極的な応募を呼びかける挨拶及び科学研究費補助金の審査経験に基づいた研究計画調書作成上のポイント等について詳細な説明が行われました。

豊中キャンパスでは、大学院理学研究科 松田准一 教授(日本学術振興会科学研究費委員会審査第二部会小委員会委員)から、科学研究費補助金制度の概要、審査体制、近



丁寧に説明を行う松田教授、熱心に聞き入る参加者
(豊中キャンパス)

年の動向、審査経験に基づいた研究計画調書作成上のポイント等について丁寧に説明が行われました。質疑応答では、研究計画調書作成に当たって注意すべき点等、多くの質問が寄せられました。

また、説明会では、松木秀彰研究推進・国際部研究推進課長から、科学研究費補助金の使用ルールの詳細、不正使用した場合の措置等について説明があり、中でも不正使用をした場合の措置等については、具体例や罰則を挙げ、研究者や事務担当職員に注意を促しました。

説明会後のアンケートでは、申請のポイントがよく分かった、申請計画が固まったなどの意見が寄せられました。説明会の参加者は、昨年に比べ増加しており、外部資金獲得について関心の高さを伺わせました。

(研究推進・国際部研究推進課)



豊富な経験を交えた馬越副学長の説明、熱心に聞き入る参加者
(吹田キャンパス)

安全衛生講演会を開催

10月7日(金)14時から、医学部銀杏会館において、大阪大学安全衛生講演会が開催されました。

講師には、本学保健センターの杉田義郎教授と大学院法学研究科の田中宏治助教授をお迎えしました。杉田講師からは「メンタルヘルス不全 - その予防と対処について - 」

田中講師からは「安全配慮義務について」、それぞれ具体的な事例を取り上げながら、示唆に富んだ大変有意義な講演をいただきました。

当日は、教職員、学生あわせて145人の参加がありました。

(安全衛生管理部)



杉田保健センター長



田中法学研究科助教授

安全衛生委員会委員等による職場巡視を実施



馬越佑吉・吹田地区事業場総括安全衛生管理者（手前）

大阪大学安全衛生強化月間（10 / 1 ~ 10 / 31）にあわせて、安全衛生管理部の巡視員とともに3事業場の安全衛生委員会委員、衛生管理者、産業医をまじえた職場巡視を実施しました。委員等からも積極的に問題箇所の指摘があり、部局の担当者に改善指導を行いました。また、委員からは、他部局の安全管理の状況を知ることができ、参考になったという感想が寄せられました。

（安全衛生管理部）

平成17年度大阪大学情報化推進講演会を開催

10月14日（金）に文部科学省大臣官房政策課情報化推進室の岩田裕美専門官及び京都大学情報環境部の福富正彦部長を講師に迎え、事務幹部職員を対象とした「情報化推進講演会」を開催しました。

講演会には大阪大学をはじめ近畿地区の7機関から63名（うち本学55名）の部課長、事務長等の事務幹部職員が参加しました。講演では岩田専門官から「電子政府の推進について」と題し、政府の取り組みをわかりやすく解説され、さらに個人情報保護の観点から情報セキュリティの重要性等について詳しい説明がありました。また、福富部長からは「国立大学における電子事務局推進について」と題し、京都大学が取り組んでいる電子事務局構築について具体例を提示しながらの講演があり、講演の後、参加者からの熱心な質問が相次ぎました。

事務の合理化・効率化をはじめ今後の大学運営において情報化推進が重要課題であり、情報化の在り方を再認識する講演会でした。

（財務部情報推進課）



講演を行う岩田専門官

望月正人助教授及び豊田政男教授 「ASME PVPD Outstanding Paper Award」受賞

大学院工学研究科の望月正人助教授及び豊田政男教授が、米国機械学会（American Society of Mechanical Engineers）から、ASME PVPD Outstanding Paper Awardを受賞しました。この賞は、圧力容器や配管の製造・運転分野において世界的に有名な「ASME 規格」のお膝元である Pressure Vessels and Piping Division で前年に公表された論文の中から、各分野ごとに1件ずつの優秀論文が選ばれるものです。

当該論文「Strategy of Considering Microstructure Effect on Weld Residual Stress Analysis」は、望月助教授と豊田教授の協同で執筆した論文であり、圧力容器や配管の分野での溶接の重要性を特に材料特性に重点を置いて構成した内容です。このたび、Material & Fabrication 分野からのノミネートとして受賞しました。

授賞式は7月20日（水）に米国・デンバーで開催された部門講演会の昼食会の席上で行われ、望月助教授が代表して出席し盾を受け取りました。



村田正幸教授、冷水佐壽教授、菊野 亨教授、西田正吾教授 「電子情報通信学会フェロー称号」受賞

大学院情報科学研究科・村田正幸教授、大学院基礎工学研究科・冷水佐壽教授、大学院情報科学研究科・菊野 亨教授、大学院基礎工学研究科・西田正吾教授（研究科長）が「電子情報通信学会フェロー称号」を受賞しました。

このフェロー制度は「学問・技術または関連する事業に関して顕著な貢献が認められ、電子情報通信学会への貢献が大きい正員に対し、フェローの称号を贈呈する」もので、1999年10月から始まっています。推薦理由は次のとおりです。

村田正幸教授 「高速・高品質な先進ネットワークアーキテクチャの研究への貢献」

冷水佐壽教授 「高電子移動度トランジスタ（HEMT）の発明と高速化への貢献」

菊野 亨教授 「高信頼情報システムの理論的研究に関する貢献」

西田正吾教授 「ヒューマンインターフェース技術の研究開発及び学術活動への貢献」

贈呈式は9月に開催された通信ソサイエティ大会、エレクトロニクスソサイエティ大会、情報・システムソサイエティ大会の各会場で行われ、斎藤忠夫学会会長より学会としての謝意と祝辞が述べられるとともに、継続しての貢献をお願いするとの挨拶がありました。

挨拶に続いて、各受賞者に対してフェロー称号賞状とフェローバッジが贈呈されました。



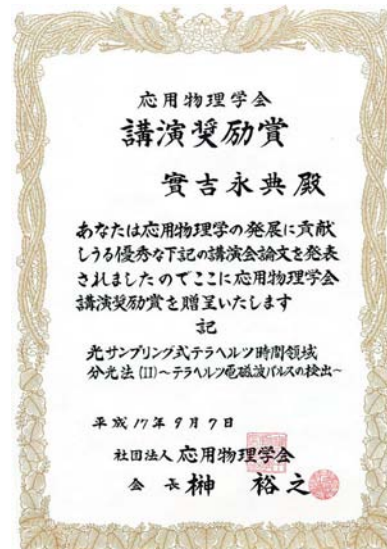
實吉永典君 第18回(2005年春季)応用物理学会講演奨励賞受賞

大学院基礎工学研究科機能創成専攻生体工学領域 博士前期課程2年 實吉永典 君が、第18回(2005年春季)応用物理学会講演奨励賞を受賞しました。

この賞は、応用物理学会の春季及び秋季の学術講演会において、応用物理学の視点から極めて興味深い一般講演論文を発表した若手会員(33才以下)に授与されるものです。

今回対象となった講演は、「光サンプリング式テラヘルツ時間領域分光法() ~テラヘルツ電磁波パルスの検出~」で、これまで測定時間短縮と周波数分解能向上の両立が困難とされてきたテラヘルツ時間領域分光法に対して、フェムト秒非同期光サンプリング法の適用により、大幅な測定時間短縮と理論限界周波数分解能の両立に初めて成功したことが評価されました。

今回は2005年春季学術講演会(埼玉大学)で発表された659件の申請講演から41名が選出されました。



澤中健一君 IQEC/CLEO-PR 2005 Best Student Paper Award 受賞

大学院基礎工学研究科機能創成専攻生体工学領域博士前期課程1年 澤中健一 君が、International Quantum Electronics Conference 2005 and the Pacific Rim Conference on Lasers and Electro-Optics 2005 (IQEC / CLEO-PR 2005) において Best Student Paper Award を受賞しました。

この賞は、本国際会議において最もクオリティの高い論文を提出した学生に対して授与されるものです。

今回対象となった論文は、「Real-time one-dimensional terahertz time-domain spectroscopic imaging」で、その有用性にも関わらず長い測定時間が実用化の大きな障害となっていたテラヘルツ時間領域分光イメージングにおいて、電気光学的時間-空間変換と線集光テラヘルツ光学系の導入という独自の手法によって、その実時間化を初めて可能にした点が評価されました。



堤 研二助教授 昭和シェル石油環境研究助成財団 「環境研究課題賞」受賞

大学院文学研究科の堤 研二助教授（人文地理学教室）が、昭和シェル石油環境研究助成財団より第1回「環境研究課題賞」を受賞しました。この賞は同財団が2005年で創設10周年を迎えたことを機に、従来の研究助成に加えて「環境研究成果賞」とともに創設されたもので、環境研究の分野で優れた研究課題を提示した者に授与されるものです。研究助成申請479件のうち、助成採択は49件、うち一般研究は192件中16件が採択され、その中からさらに2件が「環境研究課題賞」を授与されました。堤助教授の受賞テーマは「水をめぐる環境コモンズとsocial capital」で、山間地域の水・森林を守り育てることと人々の社会的紐帯とに焦点を当てるものです。9月2日（金）にホテルグランバシフィクメリディアン（東京都港区台場）において受賞式・授与式が開催され、2005年度同財団研究助成（一般研究）150万円も授与されました。



森田清三教授 UBSスペシャル・アワード [ナノテクノロジー・材料部門賞] 受賞

大学院工学研究科の森田清三教授は、9月27日（火）～29日（木）に東京国際フォーラムで開催された、「イノベーション・ジャパン 2005－大学見本市」（主催：科学技術振興機構及びNEDO技術開発機構、共催：文部科学省、経済産業省など、後援：日本経済新聞社、テレビ東京、日本学術会議、知的財産戦略本部など）において、「原子レベルでの新機能材料探索・作成技術」を出展し、UBSスペシャル・アワード[ナノテクノロジー・材料部門賞]を受賞しました。

『イノベーション・ジャパン 2005－大学見本市』は、日本全国の大学の優れた知財を広く産業界に紹介することによって、技術移転、イノベーション創出の推進を目指す、国内最大規模の産学マッチングイベントです。本アワードは、『イノベーション・ジャパン－大学見本市』における大学ゾーン全出展者の中から、「ナノテクノロジー・材料」「ライフサイエンス・バイオ」「医療・福祉」「IT」「環境・エネルギー」「製造技術・ロボット」の6分野に分けて、日経BP社の専門ジャーナリストが、最もビジネスの可能性を感じる研究成果として、UBS賞を選出したものです。



新部局長紹介

サイバーメディアセンター長



下 條 真 司 (しもじょう しんじ)



【略歴】

- 昭56. 3 大阪大学基礎工学部卒業
- 58. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了
- 61. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程修了
- 61. 3 工学博士(大阪大学)
- 61. 4 大阪大学助手基礎工学部
- 平元. 2 大阪大学講師大型計算機センター
- 3. 4 大阪大学助教授大型計算機センター
- 10. 4 大阪大学教授大型計算機センター
- 12. 4 大阪大学サイバーメディアセンター副センター長
- 17. 8 大阪大学サイバーメディアセンター長(平成19. 8まで)

新教授紹介

藤 原 彰 夫 (ふじわら あきお)



【略歴】

- 昭59. 3 東京大学工学部卒業
- 平 5. 3 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
- 5. 4 東京大学工学部技官
- 5. 5 東京大学助手工学部
- 6.10 大阪大学講師理学部
- 7. 2 博士(工学)(東京大学)
- 8. 4 大阪大学講師大学院理学研究科
- 12.10 大阪大学助教授大学院理学研究科
- 17.10 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科数学専攻
実験数学講座
専門分野：数理工学

狩 野 方 伸 (かのう まさのぶ)



【略歴】

- 昭57. 3 東京医科歯科大学医学部卒業
- 61. 3 東京大学大学院医学研究科修了
- 61. 4 自治医科大学
- 平 7.10 理化学研究所
- 10. 4 金沢大学教授医学部
- 13. 4 金沢大学教授大学院医学系研究科
- 17.10 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科神経科学講座
(細胞神経科学)
専門分野：神経生理学、神経生物学

新教授紹介

奈良 敬 (なら さとし)



所 属：大学院工学研究科地球総合工学専攻
専門分野：土木構造、構造力学、鋼構造学、
構造工学、橋梁工学

【略歴】

- 昭51. 3 大阪大学工学部土木工学科卒業
- 53. 3 大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻
博士前期課程修了
- 53. 4 大阪大学助手工学部
- 62. 4 岐阜大学助手工学部
- 62. 5 工学博士（大阪大学）
- 63. 3 岐阜大学助教授工学部
- 平 7. 5 岐阜大学教授工学部
- 12. 4 岐阜大学総合情報処理センター長
- 15. 4 岐阜大学教授総合情報メディアセンター
- 15. 4 岐阜大学評議員（H16.4まで）
岐阜大学総合情報メディアセンター長（H17.7まで）
- 17. 8 大阪大学教授大学院工学研究科

川 野 聡 恭 (かわの さとゆき)



所 属：大学院基礎工学研究科機能創成専攻
機能デザイン領域推進工学講座
専門分野：分子流体工学、プラズマ流体工学

【略歴】

- 昭62. 3 東北大学工学部機械工学第二学科卒業
- 平成. 3 東北大学大学院工学研究科博士課程前期2年の課程修了
- 3. 4 日本学術振興会特別研究員（平成5年3月まで）
- 4. 3 東北大学大学院工学研究科博士課程後期3年の課程修了
- 5. 4 東北大学助手流体科学研究所
- 8. 7 東北大学助教授流体科学研究所
- 12. 7 東北大学助教授大学院工学研究科
- 15. 8 東北大学助教授流体科学研究所
- 15.10 東北大学助教授学際科学国際高等研究センター
（流体科学研究所兼務）
- 17.10 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

河 原 源 太 (かわはら げんた)



所 属：大学院基礎工学研究科機能創成専攻
非線形力学領域熱流体工学講座
専門分野：熱流体工学

【略歴】

- 昭62. 3 大阪大学基礎工学部機械工学科卒業
- 平成. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻前期課程修了
- 元. 4 愛媛大学助手工学部
- 6. 5 博士（工学）（大阪大学）
- 8. 1 愛媛大学助教授工学部
- 13. 9 京都大学助教授大学院工学研究科
- 17.10 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

東風西風

歯学部希少価値について



名誉教授 河村 洋二郎

阪大学報「阪大NOW」の東風西風リレー随想に歯学部についてあまり知られていない、また理解してもらいたい話題を紹介してほしいと新しく歯学研究科長に就任された高田健治研究科長から依頼を受けた。

名誉教授と言っても私のように80歳代半ばの年寄り、そのうえ長年住み慣れた阪大吹田キャンパスに近い旧宅を離れ、息子、娘や孫達の住む関東に転居して2年、吹田市の歯学部を訪れる機会もあまりない。

しかし、私が阪大在籍時代に積極的に取り組んできた口腔生理学についての教育・研究並びに口腔・歯科医療業務などを介して得た口の働きの大切さを現在の社会に広く理解させたいと長年思ってきた。特に法人化した大学は、口の働き、口の健康が人にとって生涯大切なことを十分に理解してほしい。

前記の諸問題については今から10年も以前に出版した拙書「口と人生」¹⁾、「口と生活」²⁾、「口と研究」³⁾に詳細を記載している。参考にさせていただければ幸いである。

これらの著書には口の健康問題以外に従来阪大本部事務局にある医・理・工の各学部を他の学部より優先させる傾向や、各学部の行事や同窓会活動の紹介、伝達の不備なことなど阪大に関する問題をも色々取り上げている。例えば、医学部学友会の活動、歯学部同窓会が各地区に支部を持って積極的にそれぞれの地区で阪大の特性を紹介していることなど、どの程度本部事務局につたえられているか気になることである。

さて話は変わるが、欧米や南米では口の健康・口の働きと口腔・歯科医療の重要性が古くから広く理解されていて、それに関する教育活動が積極的に実施されている。例えば図1にコピーを紹介したがブラジルのサンパウロで開催される「口腔機能に対する神経生理学的知識をどのように臨床に活用するか」を主題にした2006年の年次総会で、私に口腔生理学について1時間の特別講演の依頼が届いた。高齢なので残念ながら辞退したが、このことも、私がアメリカUCLAの客員教授時代(1960年)に行った口腔生理学についての講演(図2)やその後の活動が南米にも広く知られたのだと光栄に思っている。

法人組織になった大学も経営面だけでなく、口の健康、口の働きの大切さについて積極的に取り上げてほしい。

São Paulo, May 21st, 2005.
Dear Professor Kawamura,

In behalf of Academia Brasileira de Fisiopatologia Crânio-Oro-Cervical (ABFCOC), we would like to invite you to come to our Annual Meeting 2006.

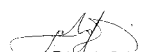
The meeting central theme will be "A clinical approach to Neurobiology of Oral Functions" and we would like to have you lecturing about Oral Physiology (could be one hour) to celebrate your contribution to dental field when you will receive a especial homage from the Academia Brasileira de Fisiopatologia Crânio-Oro-Cervical, ABFCOC.

We are open to suggestions. The important is you in Brazil

Of course lodging and air tickets expenses for you and your wife will be under ABFCOC responsibility.

Looking forward to have the opportunity and honor of your presence in 2006.

Wilma A. Simões
ABFCOC Scientific Committee


Eduardo Sakai
President ABFCOC 2006

sakaiofm@osite.com.br
Rua Aurea, 269 - Vila Mariana
São Paulo - SP - BRASIL

図1 2006年
ブラジル生体病理アカデミー
年次総会での講演依頼



UNIVERSITY OF CALIFORNIA, LOS ANGELES

WEEKLY CALENDAR

Published weekly, during the Academic Year, except vacations, by the Office of Public Information, 405 Hilgard Ave. Los Angeles 24. Please notify editor in case of change of address.

Vol. XXIX, No. 27

All lectures, musical events, etc., open to the public free of charge—except when otherwise specified. For further information telephone GRanite 30971 or BRadshaw 28161.

May 15, 1960

SUNDAY, MAY 15

Radio Program—"When the Kidneys Fail." The University Explorer tells the story of acute kidney failure and a relatively simple technique developed to control it. Authorities are Dr. Morton H. Maxwell, associate clinical professor of medicine, and Dr. Charles Kleeman, associate professor of medicine, Los Angeles. At 9:30 a.m. on station KNX.

Concert—"Music of China" with Lui Tsun-Yuen, performing on the Pipa and the Chin. Dr. Mantle Hood will be commentator. At 3 p.m. in Schoenberg Hall.

Concert—"Music of Java," directed by Dr. Mantle Hood and featuring Javanese Orchestral Ensemble and Hardjo Susilo, dancer. At 8:30 p.m. in Schoenberg Hall.

Play—"The Good Woman of Setzuan," directed by Henry Goodman and presented by the Theater Arts Department. At 8:30 p.m. in Royce Hall 170 through May 21. Limited number of tickets at \$1.50 available at the door.

Radio Program—"Science Editor." A commentary on current news from scientific laboratories throughout the world. At 10:15 p.m. on station KNX.

MONDAY, MAY 16

Lecture—"Japanese Court Poetry" by Dr. Earl Miner, assistant professor of English. At 3 p.m. in Humanities Building 1200.

Meteorology Seminar—"The Circulation in the Polar Stratosphere" by Jae R. Ballif, graduate student. At 4 p.m. in Mathematical Sciences Building 5200.

Zoology Seminar—"Swimming Performance in Characin Fishes" by Dr. Vladimir Walters, American Museum of Natural History. At 4 p.m. in Life Sciences Building 2147.

Physiology Seminar—"Neurophysiological Mechanisms of the Jaw Movement" by Dr. Yojiro Kawamura, visiting professor. At 4:30 p.m. in Medical Center 23-105.

TUESDAY, MAY 17

Noon Concert—Twentieth Century Music for Two Pianos by Willem Adriaansz and Michael Zearott. At 12 noon in Schoenberg Hall.

African Studies Seminar—"Classifications of African Languages" by Dr. Joseph Greenberg, professor of anthropology, Columbia University. At 2 p.m. in Haines Hall 152.

Lecture—"Paintings of the Indian Raga" by John Rosenfield, assistant professor of art. At 3 p.m. in Humanities Building 1200.

Bacteriology Seminar—"Carcinogenesis by a Tumor Virus (Avian leukosis)" by Dr. Marcel Baluda, lecturer, and research associate in pediatrics, City of Hope. At 4 p.m. in Life Sciences Building 2147.

Concert—"Music of Japan: Naga-uta" directed by William P. Malm. At 8:30 p.m. in Schoenberg Hall.

WEDNESDAY, MAY 18

Infectious Diseases Seminar—"The Organization of Ordered Biological Structures" by Dr. Fritiof S. Sjostrand, professor of zoology. At 1 p.m. in Medical Center 33-103.

Medical History Lecture—"The Beginnings of Cytology" by Dr. A. Rupert Hall, associate research medical historian. At 1 p.m. in Medical Center 13-105.

English Lecture—"Contemporary Satirists: E. B. White and James Thurber" by Dr. Robert Falk, associate professor. At 3 p.m. in Humanities Building 1200.

Lecture—"The Law and the Profits" by C. Northcote Parkinson, former Raffles Professor of History, University of Malaya. At 3:30 p.m. in Moore Hall 100.

Anatomy Seminar—"Serotonin and Cerebral Function" by Dr. A. James Hance, assistant research pharmacologist. At 4 p.m. in Medical Center 33-103.

図2 UCLAの客員教授時代(1960年)行った口腔生理学についての講演プログラム

私に原稿依頼のあった9月2日(金)は台風14号が宮崎地方に上陸し、九州・四国は豪雨と強風に悩まされ、多くの人々が避難した。またアメリカでも台風カトリナによってニューオーリンズでは一万人近い死者まで出る大被害があって多くの人々が避難生活を送っている。これらの被害者の方々が、一番切実に感じたことは、食べること、飲むこと、話し合っ

て元気づけあうことなどの大切さであったと思う。これらはすべて口が働いて出来ることである。

歯が健全で舌も顎も異常なく働き、口の実感が妨げられていないことなどの尊さを強調してペンを置きたい。

参考文献

- 1) 口と人生： 河村洋二郎、医歯薬出版、東京、1985年
- 2) 口と生活： 河村洋二郎、口腔保健協会、東京、平成6年
- 3) 口と研究 - 口の生理学の研究・教育に生きて - : 河村洋二郎、口腔保健協会、東京、平成7年

名誉教授の近況

大 路 清 嗣 (工・H7 退官)	大阪大学を定年退職してから早や10年余。前半の5年は龍谷大学理工学部にて再就職。2000年に二度目の定年を迎え、以来5年間余、定職には就いていない。龍谷大学では、最後の大学生活を静かな環境で締め括りたいと希っていたが、そうは行かず、最初の1年を除いて、4年間も管理の仕事に就く羽目に陥った。しかし、振返って、多くの新しい知己を得、又国立、私立両方の、大学の管理運営に当たったことは、貴重な体験であったと思っている。目下の最大の課題は健康の維持、できれば向上、と心得て、週7日、毎日1万5千歩ウォーキングと30分のストレッチ体操、それに20分の歯周病予防の歯の手入れを実行している。おかげ様で、今のところ体調は上々、元気に日々を送らせて頂いている。
武 居 文 彦 (院理・H12 退官)	一．勤 務 先：湘南工科大学（非常勤） ㈱オキサイド（技術顧問） 二．研究活動：光通信用結晶（LiNbO₃、LiTaO₃）の開発研究 三．近 況：健康状態は良好ですが、仕事が結構忙しく、趣味の登山・考古学に時間があまりとれません。
平 田 光 児 (院理・H12 退官)	退官以来、看護専門学校の若い人たちに物理の基本を教える仕事をやってまいりました。今まで教えた学校は8校にもなりますが、現在は5つの学校、7つのクラスで授業を続けております。体力のこともありますので、一日に九十分で1コマの授業を2コマ以内と定めております。案外、住居のある大阪府では仕事が無く、兵庫県で3箇所、京都府で2箇所と分かれておりますので、週日は「今日は東に明日は西に」といった生活になりますが、案外元気で勤められていることを感謝しております。 生徒さんは二十歳前後の（男子も少しはおりますが）女性を中心に、この元気な世代の活力を貰って私も頑張っている次第です。 今のところ、「看護学校で物理を」という要望がかなりあるようで、体力の続くかぎり、お役に立てれば、と思っております。 とにかく元気にしておりますので。
宮 西 正 宜 (院理・H15 退官)	早いもので退職してから2年の歳月が過ぎようとしています。その間法人化という大きな節目を無事乗り越えて順調に発展している大阪大学の様子を垣間見るにつけ、大きな安堵を感じるとともに大変喜ばしく思っています。 退職後は関西学院大学の理工学部にて勤めています。石橋キャンパスの横を走る中央環状線を車で走りながら通勤していますが、正門や理学研究科の宇宙物理棟を見るたびに在職時を懐かしく思い出しています。関西学院大学における日常も大きく変わることはありません。どちらかといえば教育に重点が懸かっていますが、合わせれば1年に3ヶ月近い授業のない時期を利用して、国内や国外の研究集会に顔をのぞかせています。 阪大に関係することといえば、在職時に戴いた著作に目を通していただく暇ができたことです。しばらく系統だった読書もできなかったのですが、著作に触発されて周辺の書物に手を出す心の余裕が出てきました。忙しいときは忙しいなりに、暇ができたときもそれなりに、自分を見失わないように過ごして行きたいと念じています。

山 本 幸 佳 (ラ・H15 退官)	退官後にまだ残っていた大きな仕事は、文部科学省の「放射線安全規制検討会」の委員として、放射線障害防止法の改正を審議することでした。30 年ぶりの大改正ということで各方面に大きな議論を呼びましたが、この 6 月 1 日にやっと政省令も含めて施行されることになってやれやれといった心境です。今後はまだまだ改正の要点や必然性についての普及活動の仕事が待っています。 昨年 11 月には文部科学大臣より「原子力・放射線安全管理功労表彰」を受けました。 現在は近畿大学の方へ週 2 回講義に出かけています。
吉 川 邦 彦 (院医・H15 退官)	退官後は地域診療に直接タッチしたいと思っていましたので、大阪市北区の行岡病院と川西市の協立病院で計週 3 回の皮膚科診療を担当しています。当初は患者さんとの触れ合いを楽しめましたが、徐々に患者数が増え時間的余裕が無くなってきました。 マルホ株式会社は皮膚科領域の薬剤への特化を目標としておられますので、学術顧問として研究所の若い人達相手に皮膚科学の指導に当たっています。また島根県金城町で湧出する天然水が全国的に人気を博しています。販売元の株式会社 K F G がその水を利用した化粧品造りを始めましたので、小生は顧問として製品の皮膚安全性の検討や販売のための皮膚科学的情報提供に当たっております。
鈴 木 敏 夫 (院工・H16 退官)	退官後 1 年余り過ぎましたが元気に過ごしております。 私の一週間は木曜日から始まります。午前中から金曜日に行う私立大学の講義用配布資料の準備です。欠席者も資料が入手できるように、WEB での公開に向けパソコンで四苦八苦。金曜日の午前と午後には各 100 人弱の眠れる獅子を相手に講義。土日は何をしているか分からず。月、火、水は家事調停委員の仕事としてもっぱら離婚話を聴き、やっと水曜の晩に趣味の混声合唱を楽しむことになります。今年の夏は 7 月 22 日にバッハのマタイ受難曲を外山雄三さんの指揮でやりますが、ドイツ語の歌詞を覚えるべく、頭をフル稼働させて一週間の終わりです。

○平成 17 年度大阪文化賞

芝 哲 夫 名誉教授 (理学部)

有機生物化学の分野で世界的な業績を挙げたほか、蘭学や適塾研究者としても活動

柏 木 哲 夫 名誉教授 (人間科学部)

昭和 48 年に日本で初めてホスピスプログラムなど、ホスピスの発展に大きな功績

〔 大阪文化賞は、大阪の文化・芸術の振興に多大な貢献をされた個人または団体に対し、その業績をたたえて贈呈されるものです。 〕

扇谷 尚名誉教授(人間科学部)逝去



本学名誉教授扇谷 尚先生は、平成 17 年 6 月 16 日(木)虚血性心疾患のため、逝去されました。享年 88 歳。

先生は、大正 6 年 5 月 3 日東京にお生まれになり、昭和 17 年 9 月東京帝国大学文学部教育学科を卒業後、東京第一師範学校助教授、東京学芸大学助教授を経て、昭和 30 年 4 月大阪大学助教授(文学部)に就任されました。昭和 47 年 5 月大阪大学人間科学部創設と同時に、同学部教授に配置換え、教育技術学講座を担当し、多数の後進の育成に携わりました。とりわけ、人間科学部の創立理念と関わる教育課程の編成に尽力し、また、昭和 47 年 5 月から 49 年 4 月まで、同 53 年 4 月から 55 年 3 月まで 2 回にわたり評議員としてその発展に寄与されました。

昭和 56 年 4 月停年退官されたあとは、甲南女子大学教授、大阪薫英女子短期大学長、平成 13 年 4 月大阪人間科学大学の初代学長を歴任されるなど、平成 17 年 3 月までご活躍されました。

先生の研究は、教育課程、教育方法を中心として広く教育学にわたります。とくに、戦後のアメリカの教育学の系譜をうけたカリキュラム編成論に着目し、その最初の紹介を体系的に手がけるとともに、その理論構築を独自に展開しました。それは、一般教育と専門教育との関連をめぐって、人間としての役割と専門人としての役割を遂行していく際に遭遇する役割葛藤(Role Conflict)を、一般教育と専門教育との結節点として、統合カリキュラムを編成する理論といえます。その背景のもとに、大学における

一般教育研究に力を注がれ、近畿地区からやがては全国的規模の一般教育学会(現・大学教育学会)の創立(昭和 54 年)とともに、初代会長を務めるなど多大な貢献をされました。

続く、教育方法学(教育技術学)の分野では、従来の大学教育では、講義が中心で、それを補うものとして討議・演習があるとされるのに対して、相互交流的なコミュニケーションを重視し、討議法こそが、中核的な教育方法であり、講義はそれを補うものであると主張し、自ら実践で示したことは、大学教育方法が課題となった今日、大いに注目されています。

また、近年、教育学の広い視座から、人間関係論を展開し、地球規模の人間愛まで到達しようとする研究を継続してきました。

このような大学教育への功績ばかりでなく、日本教育学会、日本教育方法学会、日本カリキュラム学会などの理事として活躍され、日本教育工学会の発展に際しては、そのリーダシップを発揮し、常任編集員として学会の発展に尽くされました。また、文部省教育職員養成審議会委員、文部省視学委員として国の文教政策にも貢献されています。そのほか国立大学協会の専門委員、大学基準協会の判定委員として、高等教育の発展に尽くされました。

平成 17 年 6 月 16 日に、正四位を叙位されました。

先生は、このように我が国の教育学、教育方法学、カリキュラム論の研究分野の発展に、まさに多大の貢献をなされ、そのお人柄とともにその功績は長く記念されることでしょう。ここに謹んで哀悼の意を表します。

田中正吾名誉教授(人間科学部)逝去



本学名誉教授田中正吾先生は、かねて病氣療養中のところ、平成17年7月19日(火)、肺炎のため逝去されました。享年87歳。

先生は、大正7年6月4日山口県に生まれ、昭和17年9月東京帝国大学文学部教育学科を卒業後、同大学院を修了し、同19年6月から同年8月までと同20年3月から同21年5月までの間応召、昭和21年9月中央教育研究所所員、昭和22年4月立教大学講師・大妻女子大学講師、昭和23年4月立教大学文学部助教授、同教授を経て、昭和29年8月大阪大学文学部に助教授として就任されました。昭和39年9月から文学部教授として教育心理学講座を担当され、昭和44年9月から同年12月まで文学部長及び評議員、また昭和47年5月人間科学部創設と同時に同学部教授に配置換、同49年4月までの2年間、人間科学部長及び評議員として、大阪大学及び同学部の発展に寄与されました。なかでも、人間科学部初代学部長として、同学部の創設準備から創設へと文科系学部の充実に多大な貢献をされました。昭和56年4月放送教育開発センター教授に配置換後も1年間人間科学部教授を併任されました。昭和57年4月には大阪大学名誉教授の称号を授与され、同60年3月停年退官されました。退官後も神戸女子大学文学部教授、附属図書館長、大学院文学研究科長を歴任され、女子教育の分野においても大きく貢献されました。

先生は長年にわたって教育者として常に真摯な態度で学生の教育と指導に当たられ、多数の後進の育成に尽力されました。また先生のご研究は、知能、学習、視聴覚教育と多岐に渡りますが、いずれもわが国の教育学、心理学研究の

発展の礎となる先見的なものでした。先生は立教大学在職中、第二次世界大戦後最初の留学生として渡米し、アイオワ州立大学の研究員として知能検査法の研究を行い、その成果は、帰国後の昭和28年に「知能の心理と教育」(金子書房)に著され、当時の最も優れた知能心理に関する著作として注目されました。また同時に本書において、心理学における因子分析法を我国に紹介するなど、この分野の研究に多大な貢献をなされました。その後、先生はわが国で最も早く視聴覚教育の研究に着手し、視聴覚教材や学習オートメーションについて開発的研究を続け、ティーチング・マシンをわが国で初めて作成されました。これらの成果は、その後の教育科学及び学校教育の現場に大きく寄与したといえるでしょう。また、これらの成果により、昭和39年10月大阪大学より文学博士の学位を授与され、「プログラム学習の研究」(昭和41年)に集大成されました。また先生は、放送教育開発センター在職中には、運営評議員や所長事務代理等の役職を歴任され、わが国の放送教育の中心的存在である草創期の同センターの発展と充実に努め、わが国の放送教育の開発研究の基礎を築き上げるという多大な貢献をなされました。平成6年には、先生の多大な功績に対し、勲二等瑞宝章が授与されています。

このように先生は、わが国の文科系学部の発展に多大な尽力をされました。また大学の外においても教育学、教育心理学の発展に尽力され、特に視聴覚教育の開発的研究と放送教育の発展充実に多大に貢献され、その功績は誠に顕著であるといえましょう。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

多田道彦名誉教授(医学部)逝去



本学名誉教授多田道彦先生は、去る8月5日(金)、食道がんのため本学医学部附属病院で逝去されました。享年67歳。

先生は昭和38年3月大阪大学医学部を卒業され、翌年4月大阪大学大学院医学研究科に入学し、昭和43年3月同研究科を修了、医学博士の学位を授与されました。昭和43年7月よりコーネル大学医学部附属の筋肉構造研究所、昭和45年11月よりニューヨーク市立大学マウント・サイナイ医学部循環器内科にて研究員を務めた後、帰国されました。昭和50年2月大阪大学助手医学部に採用され、昭和55年4月に大阪大学大学院医科学修士課程発足に際して大阪大学助教授医学部に、昭和59年1月には大阪大学教授医学部に昇任されました。平成14年3月に定年退官後は大手前栄養学院教授として教職に携わると共に産学協同で設立された株式会社ゲノム医療情報解析センター社長としてゲノム医学の臨床応用に関与されました。

この間先生は、循環器学の分子病態学領域において優れた研究業績を挙げられました。その中でも心筋小胞体の Ca^{2+} 依存性ATPase活性を

制御する蛋白質ホスホランパンを発見するという輝かしい業績をあげられました。この研究は国際協同研究へと発展して平成5～8年に亘りヒューマン・フロンティア・サイエンス財団の研究助成金を授与されることとなりました。また近年ではこの研究は心不全における「カルシウム・サイクリング不全」なる概念にまで発展しています。

教育面においては、学部、大学院学生及び後進研究者の指導育成にたゆめぬ熱意と創意を注ぎ、門下から多数の俊英を輩出されました。

また、先生は多数の国内外の学会で評議員・理事などを務め、また平成4年には第14回国際心臓研究学会世界会議でプログラム委員長、平成12年には第17回国際心臓研究学会日本部会会長を務められました。また日本・米国共催の心臓血管系に関する学術会議や心臓血管学アシロマ会議を組織されました。先生はオペラにも造詣が深くまたゴルフを非常に楽しんでおられ、世界中の数多くの友人から敬愛されていました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

渡邊信一郎名誉教授(医学部)逝去



本学名誉教授渡邊信一郎先生は、平成 17 年 8 月 26 日(金)病氣療養中のところ自宅にて逝去されました。

享年 68 歳。

先生は、兵庫県にお生まれになり、昭和 34 年 3 月大阪大学薬学部、昭和 38 年 3 月九州大学医学部をご卒業されました。昭和 39 年 4 月大阪大学大学院医学研究科に入学し、昭和 43 年 12 月に大阪大学医学博士の学位を授与されました。その後大阪大学医学部助手に採用、大阪大学医療技術短期大学部助教授に昇任、昭和 61 年 5 月同教授に昇任、平成 5 年 10 月大阪大学医学部保健学科教授に配置換となり、平成

12 年 3 月定年退官され大阪大学名誉教授の称号を授与されました。

先生は、大阪大学教授として内科学特に臨床アレルギー学、免疫学、腫瘍学、臨床検査学、看護学の幅広い分野で多彩な研究を展開し、数多くの業績をあげられ、学生の指導育成においてもたゆまぬ熱意と創意を注がれ、大阪大学並びに医学部保健学科の発展に尽力されました。

退官後も病後児保育の医療業務に携わり、地域医療に貢献されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

- ABC ラジオの定期番組でPR - 「きゃぴきゃぴキャンパス@阪大」

工学部では、10月からABCラジオの定期番組でPRします。教授や学生が出演し、生のキャンパスライフを紹介します。

毎週火曜日深夜（水曜午前）1時30分からの30分番組「羽谷直子のきゃぴきゃぴキャンパス@阪大」。工学部の教員が研究を紹介したり、受験生からの質問に答えるほか、学生らもキャンパスライフを伝えたり、学内の人気スポットを紹介します。

理系離れと言われている高校生との心のキャッチボールを通して科学の面白さを理解してもらうことも狙いの一つです。



収録風景



人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する啓発行事の一環として、講演会を以下のとおり開催します。

今回は、アカデミック・ハラスメント問題をテーマとして取り上げます。

教職員・学生の積極的な参加をお待ちしています。

- 日 時 平成17年12月5日(月) 10時30分～12時00分
- 会 場 基礎工学部シグマホール
- 講 師 北 口 末 広（近畿大学人権問題研究所教授）
- 演 題 「部落問題の今 - 人権の時代を切りひらく」
- 問い合わせ先 総務部総務課総務係（内線7014）

適塾記念講演会開催

本年度の適塾記念講演会が、本学と適塾記念会との共催で以下のとおり開催されますので、多数のご参加をお待ちしています。

講演1「中之島の蔵屋敷・堂島の米会所」

大阪大学大学院経済学研究科教授 宮本 又郎 氏

江戸時代の大坂は「天下の台所」と呼ばれ、諸国からの物産が集散したが、なかでも最大の物資は年貢米であった。年貢米や特産物を売り捌くために各藩は蔵屋敷を中之島周辺や天満堀川周辺に設置したが、その一つ、久留米藩蔵屋敷は大阪大学中之島センターの地にあった。大坂蔵屋敷にはどのようにして米が運び込まれ、どのようにして売られたのか、どんな商人が関係していたのかなど、蔵屋敷の経済的役割を概説する。また、蔵屋敷で販売された米は堂島米会所で売買された。そしてそこでは、世界で最初に組織的な先物市場が開設された。講演では、堂島米会所の仕組みや機能についても解説したい。

講演2「アインシュタインとわれわれの宇宙」

大阪大学大学教育実践センター長 高杉 英一 氏

アインシュタインの生涯と、相対性理論が生まれた背景を簡単に説明する。アインシュタインは、宇宙は定常であるとの信念から宇宙項を導入した。しかし、「宇宙項の導入は自分の生涯で最大の失敗だった」と言わしめたように、この考えは否定された。最近になり、われわれの宇宙を占めている物質が明らかになってきたが、驚いたことに宇宙の70%はダークエネルギー（アインシュタインの宇宙項に対応するもの）で満ちており、加速膨張していることがわかった。アインシュタインの宇宙項がリバイブしたのである。

- 日 時 / 平成 17 年 11 月 30 日(水) 午後 6 時 ~ 8 時
- 会 場 / 大阪大学中之島センター
佐治敬三メモリアルホール(10 階)
〒530-0005 大阪市北区中之島 4353
TEL 06 - 6444 - 2100
- 受講料 / 無 料(定員 190 名)
事前に下記『問い合わせ先』までお申し込みください

主 催 大阪大学・適塾記念会
問い合わせ先 大阪大学総務部総務課総務係
〒565-0871 吹田市山田丘 1 - 1
TEL 06 - 6879 - 7014
FAX 06 - 6879 - 7008

<会場周辺地図>



電車によるアクセス

阪神本線 福島駅より	徒歩約 9 分
JR 東西線 新福島駅より	徒歩約 9 分
JR 環状線 福島駅より	徒歩約 12 分
地下鉄四つ橋線 肥後橋駅より	徒歩約 10 分
地下鉄御堂筋線 淀屋橋駅より	徒歩約 16 分

バスによるアクセス

大阪市バス(53 系統・75 系統)
大阪駅前バスターミナル → 田養橋 下車 徒歩 1 分

自然科学の基礎を訪ねる 「科学の最先端を市民に語る - 市民にむけた第21回湯川記念講演会」開催

高校生、一般の方を対象に、最前線の物理を紹介します。

日 時：平成 17 年 11 月 19 日(土) 20 日(日) 11 時から 17 時

場 所：大阪大学中之島センター

11 月 19 日(土) 11 時から 17 時：実験のデモンストレーション 7 F 講義室 2、3

大阪大学物理学専攻のスタッフによる様々な実験デモ

11 月 20 日(日) 11 時から 17 時：第 21 回湯川記念講演会 10 F 佐治敬三メモリアルホール

11:00 ~ 12:00 牧島一夫(東京大学大学院理学系研究科)

「ロケット、科学衛星、ブラックホール」

13:00 ~ 14:00 土屋麻人(大阪大学大学院理学研究科)

「スーパースtring理論 - 究極理論への挑戦 - 」

14:30 ~ 15:30 田島節子(大阪大学大学院理学研究科)

「高温超伝導の謎」

16:00 ~ 17:00 保坂 淳(大阪大学核物理研究センター)

「サブアトム世界の魅力」

参加費：無料

主 催：世界物理年関西委員会、大阪大学湯川記念室、大阪市立科学館、日本物理教育学会近畿支部

共 催：日本物理学会大阪支部、大阪大学大学院理学研究科物理学専攻、他

詳細は湯川記念室ホームページ <http://www.yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp/> をご覧下さい。

大阪大学所蔵 須田国太郎能・狂言デッサン世にあらわる!!

■大阪大学附属図書館の情報発信と社会貢献・地域貢献

○須田国太郎と能・狂言デッサンおよびその電子化

須田国太郎は元芸術院会員で、近代日本を代表する洋画家です。専門とする洋画制作のかたわら昭和2年から昭和32年までのほぼ30年間にわたって、京都や大阪の能楽堂で上演された能や狂言の名手の舞台を精力的に描き続けました。その数は約6000枚あまりという膨大なものです。

大阪大学は、そのうち約5000枚のデッサンを平成13年7月に須田 寛氏（当時 JR 東海会長）から寄贈をうけ、貴重資料として附属図書館に収蔵しています。大阪大学附属図書館は、今年度文部科学省から特別支援事業経費の配分を受け、この経費により、社会貢献に資すべく同デッサンをデジタル化し、時期、演目、演者等に分類整理しインデックスを付した上で、Webにより広く公開し、同デッサンを美術や能楽の研究者や愛好者の利用に供することにしています。同デッサンの電子化は今年度中に完成予定です。

須田画伯の能・狂言のデッサンは、すべて能楽堂の観客席から目で演じられている舞台を瞬間的に描いたもので、ほとんどの舞台は20枚とか30枚という単位で、さながら連続写真のように描かれています。そこに描かれているのは、名手が目白押しだった昭和前期の黄金時代の舞台であり、いずれもが名匠が名手を描くという趣になっています。このデッサンは、須田芸術を考えるうえできわめて価値が高いものであり、また、近代の能楽史上においても貴重な作品群です。これまでこの貴重な資料はほとんど世に知られていませんでした。まさしく須田能・狂言デッサン世にあらわる、です。

○京都国立近代美術館における須田国太郎デッサン展示

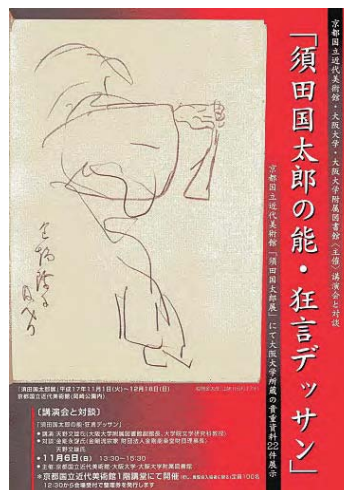
平成17年4月28日、29日に大阪大学“いちよう祭”の一環として開催された附属図書館展示会において、須田国太郎能・狂言デッサンの展示が行われました。29日には講師としてお招きした京都国立近代美術館学芸課長の島田康寛氏による「須田国太郎の世界」と題する講演会が行われ、これが機縁となって同美術館で開催予定の「須田国太郎展」に大阪大学が所蔵する能・狂言デッサンを提供することとなりました。

京都国立近代美術館における須田国太郎展は11月1日（火）から12月18日（日）まで開催され、同デッサンは22件出品されています。11月6日（日）には、天野附属図書館副館長の講演と金剛流宗家の金剛永謹氏との対談が行われました。更に、平成18年1月13日（金）から3月5日（日）に東京国立近代美術館において、4月8日（土）から5月14日（日）に福島県立美術館において同デッサンが展示される予定です。

○須田デッサン DVD の制作

京都国立近代美術館への出品に際して、同館の大型モニターで須田デッサンの映像を流すこととなり、天野大阪大学附属図書館副館長を全体の監修者として作品の選定や解説の作成が行われDVDが制作されました。内容は、須田国太郎のプロフィール、能と狂言の歴史、須田デッサンについての解説と9曲、109点のデッサン画像となっています。展示会出品とは別の作品を年代順に収録しており、須田能・狂言デッサンの神髄ともいえる貴重な映像集です。

大阪大学附属図書館は、このような事業を通じて大阪大学が所蔵する貴重な資料を広く世界に情報発信するとともに、社会貢献・地域貢献を行う所存です。



11月6日講演会のパンフレット



須田国太郎展ポスター

芸術の秋です。今回は、学内でユニークな音楽活動を始めたグループ取材しました。

大阪大学室内楽アンサンブルを始めて

工学研究科教授

甲 斐 泰



工学部学生食堂での演奏風景

-- 大阪大学室内楽アンサンブルとは。クラシック音楽のアンサンブル演奏を目的として、大阪大学の教職員・大学院生を中心に今年4月に発足しました。現在25名で活動しています。ピアノ2名、弦楽器14名、木管楽器8名、スタッフ1名です。

-- アンサンブルを始めるきっかけは。私は日本化学会に所属していますが、平成15年3月、日本化学会が創立125周年を迎え、式典に天皇皇后両陛下を、また祝賀会には常陸宮様ご夫妻をお迎えして、慶応義塾大学で盛大に年次大会が開かれました。この記念すべき大会を祝うため、日本化学会の会員で「化学オーケストラ」を編成し、祝賀会で演奏しました。翌年の日本化学会年次大会は関西学院大学で開かれましたが、その時は化学オーケストラによる演奏会を開くことになり、私が実行委員長を務めました。慶応義塾大学で演奏したメンバーに関西学院大学まで来てもらうわけにはいきませんので、関西でメンバーを新しく募りオーケストラを編成しなければならませんでした。そのとき大阪大学の日本化学会会員の方が中心になって活躍していただきました。今回のアンサンブルにも、大阪大学の化学オーケストラのメンバーに沢山参加していただいています。

-- アンサンブルを編成した目的は。国立大学は昨年4月に法人化し、私が学生だった頃に比べると教職員も学生も格段に忙しくなっています。その上、限られた期間内に着実に成果を上げることが求められていますので、毎日の時間にゆとりを感じる事が難しい状況になっています。こんな時にこそ、研究や仕事の終わった後や週末にリフレッシュすることも大切で、それを上手く活用することで、研

究や仕事にもいっそう打ち込むことができるものです。余暇の過ごし方は人により千差万別ですが、アンサンブルの良いところは、年齢や職種にかかわらず、みんなで協力して1つの音楽を作り上げていくところにあります。これは大変創造的なものですし、努力や工夫がはっきり結果に結びつきます。また、練習を積み重ねていく過程で、それまで全く面識のなかった、またこのような機会がないと知り合うことすらしない方とも親しく話すことができるようになることも貴重なものです。

-- 練習場所は。大阪大学の中で音楽の演奏ができるところは非常に限られています。学生のクラブ活動は教育の一環とされているので大学の支援が得られますが、教職員・学生の任意のグループに対するスポーツ活動や文化活動には、全く支援が得られません。そのため、化学オーケストラやアンサンブルの練習会は、工学部の学生食堂を日曜日に借りて続けてきました。ここがなければ関西地区の化学オーケストラは成立しなかったと思いますので大変有難かったのですが、アンサンブルとなるとどうしてもピアノが必要です。いろんな方にお話しご理解・ご支援いただいた結果、8月の練習会から日曜日などで空いているときにコンベンションセンター MO ホールを使わせていただける



念願のMOホールでのピアノ5重奏

ことになりました。さらに有難いことには、ウィークデイなどの夜の時間、研究や仕事が終わって練習したいメンバーのために、今使っていない部屋を当面使っても良い、と工学研究科に言っていただいたのです。このように、練習場所に自由度が得られたことは、メンバーにとってこの上ない朗報でした。

-- 練習会の様子は。練習会は、月1回、日曜日の午後1時から5時に行っています。最初は集まったメンバーで随時アンサンブル練習を始めます。2時間余りの間に、自分の持ち曲の2曲あるいは3曲の練習をした後、最後の1時間半の間はアンサンブル毎に順番に演奏し、みんなで聴きます。これは大変重要で、これがあるためにその日の練習にも身が入ります。

-- どんな曲を練習していますか。今練習しているのは、ハイドンの弦楽四重奏「皇帝」や「セレナーデ」、モーツァルトのフルート四重奏やクラリネット五重奏、オーガエ四重奏、バッハのトリオソナタ、ピアノの入った曲として

はブラームスのピアノ五重奏第1番、メンデルスゾーンのピアノ三重奏第1番、フォーレのフルートソナタなどです。今は、数名で演奏する曲を練習していますが、いずれは全員で演奏する曲も見つけて練習したいと考えています。

-- 当面の目標は。この秋一番の晴舞台は、11月11日にMOホールで開かれるドイツ年記念ケミストリーシンポジウムでドイツ関係者と日本の化学関係者の前で、ブラームスのピアノ五重奏第1番を演奏することです。この演奏にはアンサンブルのヤングクインテットが出演すべく、今練習に精を出しています。また、11月2日には、吹田祭前夜祭の催しとして、アンサンブルの演奏会を17:30からMOホールで開きます。この演奏会ではアンサンブルメンバーによるさまざまな編成の演奏が行われますので、是非ご来聴ください。また、10月11日には、日本の化学関連の6つのCOEが協力してBINDECという国際会議が開かれますが、その懇親会のオープニング演奏も行うことになっています。音楽を演奏するグループにとって、演奏機会



第5回練習会で (H17.9.25)

が得られるかどうかは、日ごろの練習活動を維持できるかどうかの決め手になりますので、このような形で演奏機会をいただけることは大変有難いことです。

-- 今の悩みは。今アンサンブルの一番の悩みは、やはりメンバーが忙しく、なかなかみんなの都合がつけられない、ということです。例えば弦楽四重奏ですと、バイオリン2人とピオラとチェロがそろって初めて演奏ができます。それも、いつものメンバーが4人揃わないといけないのですが、これがなかなか揃いません。1人で2曲、3曲と掛け持ちしていますので、1人来れないとあっちにもこっちにも影響がでてしまいます。もう少しメンバーが増えて、編成に余裕ができれば、というのが今の一番の望みです。

-- 今後の夢は。今、私たちが行っているような音楽活動が、大阪大学の日常的な活動の中に自然に溶け込んでいくことを願っています。私たちはクラシック音楽のアンサンブル演奏を目指していますが、もし合唱のグループができると

素晴らしいと思いますし、それ以外のジャンルの音楽愛好家も大学の中に沢山いると思います。またこれは音楽に限ったことではなく、スポーツ活動にしろ文化活動にしろ、大阪大学という大きな社会の中にそのような活動を自然に根付かせることによって、この社会をもっと私たち自身のもんとしていくことができるように思います。そのためには、教職員・学生のための文化活動やスポーツ活動を根付かせる土壌を与えていただけるよう、大阪大学からご支援いただけることを願っています。

<コメント>

教職員と学生が同じ趣味や目標で結ばれることに大きな意義があると思いました。大学の懐は本当に深いという気がします。

大阪大学室内楽アンサンブル ホームページ

<http://www.mls.eng.osaka-u.ac.jp/ensemble/>

かい・やすし

工学研究科応用化学専攻、蛋白質や酵素の立体構造を解析し機能との関連を研究、最近では主に高等植物の炭酸固定酵素を研究し、その反応機構を詳しく調べています。

プロフィール

大阪大学室内楽アンサンブルの活動に参加していただける皆様は、是非以下にご連絡ください。 kai@chem.eng.osaka-u.ac.jp

夕焼けのサンセット

大阪大学サンフランシスコ事務所
辻 敏彦



はじめに

私は本年6月からサンフランシスコに滞在し、海外拠点で働いています。本稿では、赴任後の主な活動と、生活の一端を記載させていただきます。

理工系大学院生のための米国夏季語学研修視察

8月16日から9月11日まで、理工系大学院生を対象とした語学研修が、カリフォルニア大学（以下UC）サンタバーバラ校にて実施されました。これは工学研究科国際交流室、基礎工学研究科国際交流委員会及びサンフランシスコ事務所が主催し、主に理工系専門分野の英語コミュニケーション能力やプレゼンテーション技能の向上のために平成15年度より実施されているものです。

当事務所からも実際のクラスを視察に行きました。学生は、授業では積極的に発言を求められ、課題も多く、ホームステイですので、まさに英語漬けの状況でした。英語の夢でも見たかもしれません。運良く、青色発光ダイオードで有名な、中村修二教授の特別講義も聞くことが出来ました。「3年から5年ひとつの研究を続ければ、何らかの成果が出る、大事なのは人のやっていないことに挑むこと、アメリカには科学者に対する正当な評価と機会が与えられる、そしてその対価さえ」とのお話に、学生は釘付けです。

研修は、UC サンタバーバラのエクステンションが実施しましたが、これは図書館、ネットワーク、学食や宿舍等のキャンパス施設を有効活用し、主に語学やIT等を有料

で教える独立採算の外部組織のようなものです。今年のエクステンションのパンフレットには、昨年のお阪大学の研修実施が写真入りで実績として載っており、他の日本の大学に対する宣伝のようでした。

研修中の緊急連絡先を、室岡所長と私の携帯にしておいたのですが、幸いにして不測の事態は起きませんでした。



UCサンタバーバラ

ロボネクスス2005

西半球最大のロボット関連イベントと言われる、ロボネクススが、10月6～9日にサンノゼでありました。大阪市シカゴ事務所と大阪府カリフォルニア事務所が押さえたブ



大阪市、大阪府、大阪大学のブース



VISION NEXTAのシュート

ースに、当事務所もお誘いをいただき、大阪大学をPRすべく参加しました。会場では大阪大学プロスペクタスやアニュアルレポート、当事務所の案内、ロボティクス関連をまとめたフライヤなどを配布しました。大阪にあるRT関連企業も参加されており、オール大阪という様相です。

大阪市は、RTQ(Robot Technology Osaka)という冊子を作成し、工学研究科浅田稔教授のメッセージや、梅田北ヤードのRTプラン等を載せ、いかに大阪がRT技術の集積に優れているか、積極的に宣伝されていました。また、去る7月に行われたロボカップ大阪で優勝した、大阪大学もその一員であるチーム大阪も、大阪市が招きました。Vision NEXTAの実演には黒山の人だかりで、時差ボケ?のせいかボールを蹴り損ねた時でさえ、歓声があがりました。

大阪大学セミナー 2005

北米での積極的な研究成果の情報発信を目指し、10月21日に Nanotechnology Today と題してパロアルトにて英語によるセミナーを実施しました。工学研究科の河田聡教授には、ナノテクノロジーとフォトニクス技術の現状と将



セミナーの様子

来についてお話しいただき、UC サンタバーバラとの共同研究で、キャンパスの隣に施設がある、三菱化学の米国研究所である MC Research & Innovation Center, Inc. の吉江建一社長には、国際共同研究において大学と企業は真のパートナーとなれるのか、というお話をいただきました。当日は、現地メディア等へ案内が載ったこともあってか、70名を超える参加者がありました。

UC 学生に対する海外情報フェア参加

UC の外部組織が、各キャンパスにて学生の海外留学、語学研修、インターンシップ等の情報を提供するフェアを毎年10月に実施しています。ブースを設ける参加機関は、キャンパス毎に参加料(100ドル程度)を払います。このフェアは、UC の10校だけでなく、カリフォルニア州立大学等の他大学も合わせて計20大学で順番に一日ずつ行われるため、参加機関の中には、カリフォルニア州を縦断するように、一ヶ月間に渡り移動を重ねる巡業のようなところもあるようです。ヨーロッパや南米、オーストラリアの大学等も参加し、附属の語学学校やサマープログラムの宣伝を行っていました。参加料や出張費を払ってまで参加する機関を呼び寄せる、UC ブランドの強さに驚かされます。



UC デーヴィスのフェアは屋外

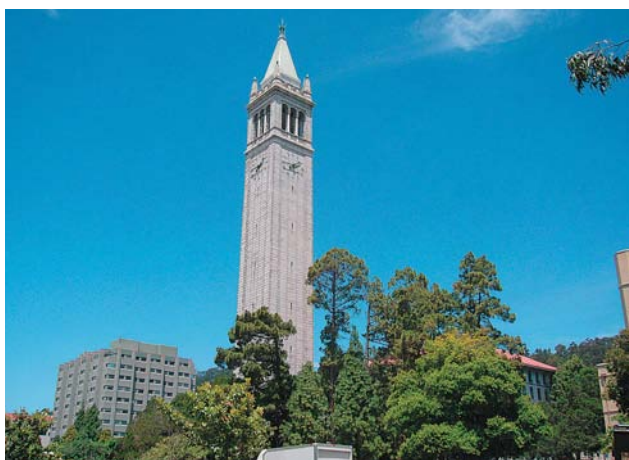
当事務所からも、地下鉄で30分のUC パークレイをはじめ、UC4校のフェアに参加し、大阪大学の交換留学プログラム等を説明しました。日本からは他に、オレゴン州ポートランドに事務所がある、早稲田大学も参加していました。

UC パークレイのホームカミングデイ

上記フェアでUC パークレイに行った日は、たまたまホームカミングデイの初日でした。これは、同窓生や学生の家族や友達も皆、UC パークレイに集まり、大学の今を伝える交流の日と言えます。内容は、総長と一緒にバーベキュー、5人のUC パークレイ現役ノーベル賞受賞者による討論会、大学の図書館や博物館等の開放、大学のアメリカ

カンフットボールチームの試合を一緒に応援したり等、盛りだくさんです。世界中から6千人が毎年参加するそうです。

同窓生を呼ぶと言っても、公式には5年に一回しか呼ばれません。今年は80年、85年...の卒業生、来年は81年、86年...の卒業生というように、5年刻みに参加者を絞っているからです。実施日もアメフトの大学戦の対戦相手も、5年先まで決まっており、例えば2010年は10月8 - 10日開催で、UCLAと対戦すると、ホームカミング日のパンフレットに記載されています。そうすると、5年後もまた来てUCLA戦を見るぞ、となるようです。



UCパークレイ

大学グッズ

アメリカの大学はどこも大学グッズが充実していますが、UCパークレイは群を抜いていると言えます。大きな建物の一階と地階に、ありとあらゆる種類の大学グッズがおいであります。旅行者ももちろん買いますが、なにより学生自らが購入し、キャンパスで着ている割合がとても高いです。学生用だけでなく、同窓生用、子供用、ベビー用、両親用、祖父母用まで取り揃えてあります。Berkeley BabyやBerkeley Grandpaとか書いてあります。商品も服だけでなく、家具にゴルフバッグ、おもちゃやエプロン、犬の首輪からパーベキューセットまで、およそ考え付く以上の大学グッズがおいであります。学生は、在学中も卒業後も愛校心を保持することができるでしょうし、子供にはベビー服を着せるのかもしれませんがね。

個人的には、太平洋をまたいで日本とサンフランシスコとを結ぶゴールデンゲートブリッジを描き、

Osaka University, San Francisco Office

Live Locally, Grow Globally

と上下に書けば、売れないかなあ、と思うのですが。

北米地区同窓会（仮称）

大阪大学でも去る7月25日の天神祭船渡御にて、大阪大学同窓会連合会が発足しました。北米地区同窓会の発足

を目指し、先に各部局の皆様には照会させていただいた同窓生情報も、おかげさまで多くの情報を集めることができました。UCパークレイも公立ですし、国立大学法人の大阪大学にも、出来ることは多いにあると思います。各研究室、各部局の同窓会が持つ、非常に高いアクティビティを、いかに大学全体レベルにまで持ってこられるのが、重要だと思っています。

特に異国の地において、人と人とのつながりの重要性は、計り知れません。サンフランシスコ事務所も、そのアラムナイセンターとしての役割を担ってゆくべく、来年早々にも北米地区同窓会開催を予定しております。

通勤雑感そして大阪

私の住むアパートメントから事務所までは、路面電車で30分かかのですが、車と同じで信号で止まるし、時刻表もないようなものです。よくドアが開かなかったり、閉まらなかったりして、立ち往生しますし、来ないと思っていたら、3台続けて来たりしますが、私は大好きです。サンフランシスコ市内なら、路面電車も地下鉄もバスも乗れる一ヶ月定期は、45ドルしますが、一回5ドルもするケーブルカーも乗り放題なのはうれしい限りです。

事務所の周りには、あまり霧はなく、サンセットよりも暖かめです。金融街で、西のウォールストリートと呼ばれます。街の人は歩くのも速く、電車もあまりきちんと並びません。エスカレーターも左側を開けますし、大阪みたいです。阪神の藪さんもいた隣のオークランド・アスレックスは、メジャーリーグなのに鳴り物あります。大阪市とサンフランシスコ市が姉妹都市なのもうなずけますね。サンフランシスコ・ジャイアンツがあること以外は、ですが。



ケーブルカーからアルカトラズ島を望む

サンセットの夕焼け

サンフランシスコのサンセットという地区に住んでいます。まわりには、オーシャンビューとかハーフムーンベイという地区もあります。要は、太平洋に面しています。霧



霧のかかったゴールデンゲートブリッジ

が多いし寒いので、よしておいたらとの声もありましたが、近くで食べた中華料理のおいしさと、夕陽の綺麗さが気に入りました。気温が華氏55度ですよと言われても、最初はよく分かりませんでしたし、何より6月には、霧などなかったのですから。



サンセットの夕焼け

季節は夏。太平洋から厚い霧がやってきました。サンセットを見ることがなくなりました。風も強いです。20メートル先の車のライトもぼんやりです。華氏55度は摂氏12.8度でした。日中も太陽が見えない日が続きます。半袖のシャツを3枚持ってきたのですが、まだ着たことはありません。しかし、ほんの時々ですが、夕陽は姿を見せてくれます。その織りなす鮮やかな朱と、どこまでも碧い空と海とのコントラストは、涼しい夏に安らぎを与えてくれます。サンフランシスコは一年中を通してあまり気温の変化

はありませんが、霧の変化で季節を感じることができます。霧の少ないという冬が、今から待ちどおしいです。

サンセットのアpartment

サンセットの部屋は、現地職員のTimさんにネットで探してもらいました。さっそく見に行き、気に入りましたが問題は、渡米直後でクレジットヒストリーという、経済的安定性を示す証拠資料も、社会保障番号という本人のID代わりの番号もなかったことです。しかし、日本の大阪から来たと言うと、どこかで聞いたことがあるような幸運がやってきました。

大家さんは大阪に行ったことがあり、そこで電車の乗り方がわからなくなりました。ある人が目的の駅まで一緒に行ってくれた後、なんとまた元の方へ帰っていったということです。大家さんはそのことをずっと感謝されていて、私が差し出した大阪大学の英文紹介冊子をしばらく眺めると、住んでいいよと言ってくれました。入居後も、箸や食器類、洗剤や食器洗いのスポンジまで置いてくれたり、家具の買い物に連れて行ってくれたり、夕飯を分けてくれたり、ありがたい限りです。涼しい夏を温めてくれる、もうひとつのものとなりました。

最後に

季節は秋。木々の葉も色付き、インディアンサマーと呼ばれる小春日和がやさしく頬を暖めます。サンセットも見える日が多くなってきました。半袖はまだ、タンスの中です。

どこの国の人でも、誰に対してでもいいのですが、親切というものは、本当にかげがえのないものだ実感しています。とりわけ国境を越え、海を越えた異国の地での人と人との交わりは、深く強く心を揺るがします。

逆の見方をすれば、異国で受けた不幸な扱いもまた、記憶に消し難いものとなります。人と人との結びつきは本当に重要なものであると、身が引き締まる思いです。

サンフランシスコ事務所の役割のひとつも、人と人とを結び付けたり、広めたり、強めたりすることだと思います。それがひいては大阪大学の情報発信につながり、プレゼンスを高め、新たな交流にもつながるのだと思います。

まずは、道で迷っている人から、はじめてみましょうか。

つじ・としひこ

プロフィール

所属：研究推進・国際部国際交流課（大阪大学サンフランシスコ事務所副所長）

経歴：平成7年同志社大学文学部英文学科卒業、同年大阪大学歯学部総務課採用。文学部、文科系総務課、学生部、研究協力部、基礎工学部を経て、平成17年より現職。その間平成11年から海外研修制度により、連合王国・ダラム大学に1年間滞在。

私の本棚

皆さんは、自分の仕事が好きですか？
今の仕事に満足していますか？

世間では、完全失業率が改善する一方、フリーター、ニート、パート、派遣社員、サービス残業、過労死など、労働を取り巻く問題が程連日紙面を賑わせています。社会人3年目に入り、仕事について改めて自問する中手にしたのが、今回ご紹介する『仕事力』です。

本書では、各界を代表する著名人15名が独自の仕事観を展開しています。

まず、生きて行く上で仕事とは何か、彼らは次の様にそれぞれ定義しています：

- 「自分の持てる力をすべて注ぎ込むこと」(朝倉撰・舞台美術家)「生涯をかけて自分の可能性を探していくこと」(安藤忠雄・建築家)「どのような人に対して、自分の力で何をしてあげたいかを捜し求めること。自分の誠意を役立てるため」(塚本能交・株式会社ワークール社長)

「動くこと、すすむこと、やってみることの連続」(柳井正・株式会社ファーストリテイリング創業者)そして「失敗を教訓に次のステップへ進むことができる。仕事の面白さは挑戦の面白さであり、自分を知る面白さ」(柳井氏)

では、彼らは具体的にどのような姿勢で仕事に取り組んでいるのでしょうか。「与えられた仕事は全てチャンス」(大前研一・UCLA 政策学部教授 / ビジネスブレークスルー大学院大学学長)「本気で取り組みれば、面白いことや感動することが必ず出てくる。大切なのは苦しくても自分で考え抜く」(安藤氏)「一日の仕事ごとに、わずかながらでも自分の力や技術を高めていく気持ち。どん

『仕事力』

朝日新聞社



な仕事にも昨日よりよくなる可能性がある」(福原義春・資生堂名誉会長)「失敗したらやり直せばいい。動かなければ何も始まらない」(今野由梨・ダイヤルサービス株式会社代表取締役社長)

ここまで読むだけでも、彼らの仕事に対する熱意に我が身を反省せざるを得ない気持ちになります。と同時に、頭のどこかでは「偉い人は元々出来る、自分には所詮無理」と、私などは最初から自分の不器用さを理由にあきらめ



てしまいそうになります。しかし、今は第一線で活躍している彼らも、最初から上手くいった訳では決してなかったそうです。「大きな試練や地獄を乗り越えてみると、辛酸に磨かれ、また一段強く魅力的になった自分に出会える。人はだれでも何度でも変化を遂げることができる」(今野氏)「高収入を得ている人は、他人にはうかがい知れない努力をしています。精一杯の仕事への取り組みがあるのみ」(柳井氏)。実際大前氏は、テキサスでの6ヶ月滞在中で「精神面でもキツイ仕事だったが、お陰で怖いものが随分なくな」り、安藤

氏は、「19歳の1年間は朝9時から翌朝の4時まで机に向かった。24歳の欧州横断旅行では1日15時間、50キロ近く歩き建築をひたすら見歩いた」そうです。

その様な人物の仕事哲学にはやはり重みを感じずにはいられません。「どんな仕事も一つ一つ違う。真剣に取り組めば、いずれどんな仕事でもこなせる、任せてやらせてもらえる人物に成長してゆく」(大前氏)「仕事をするなら、自分の行き着くところまで行け。自分の力をとことん生かし尽くしてこそ分かってくること、出来るようになることが非常に多いから。懸命に働く。それは人間にとって実に気持ちの良い生き方であり、今日まで変わることのない事実」(柳井氏)

ページをめくるにつれ、仕事とは自己実現、つまり生き方である、というメッセージが伝わってきます。仕事への取り組み方は一律ではないこと、仕事の成功には様々な方法があること、最初から天職があるのではなく、地道に取り組んでいくうちにその仕事が好きになり、そしてその道のプロになること、に気づきます。決して順風満帆ではなく、むしろ苦勞、試練続きだったからこそ今の自分があることを彼らは見せてくれています。

「35歳まで必死に学び、80歳でも若い心を持って仕事を続ける」「とにかく人生は面白くなければならない。仕事をしている間はワクワクしながら生きてみる」(安藤氏)という言葉に背中を押され、今日私は仕事場に向かいます。

工学研究科 総務課庶務係
高橋はるか

編集後記

芸術の秋、読書の秋、スポーツの秋そして食欲の秋と、いろいろな「秋」があります。

インタビューでは「芸術の秋」にふさわしく、大阪大学室内楽アンサンブルにスポットを当てています。教職員や学生が集まってこのような活動を行う事は大変ですが、とても素晴らしいことだと思います。近い将来、「秋の阪大音楽祭」などができれば、より「芸術の秋」を楽しめそうです。

「読書の秋」といえば私の本棚。本号では『仕事力』という書籍が紹介されています。いままでも様々な方が様々な本を紹介してくださっています。みなさんも、「読書の秋」に気に入った一冊を見つけてみてはいかがでしょうか。「この本をいろいろな人に読んでもらいたい!」と思ったら、ご連絡ください。お待ちしております。

また、以前のキャンパス探訪や現在のガイドマップで紹介されたものを訪ねて、木々が色づき始めた学内を眺めてまわるのも「秋」の楽しみ方の一つでは。

(瀬尾)

中之島センター交流サロン **サロンドラミカル**「SALON DE L'AMICAL」

大阪大学中之島センター9階にあるリーガロイヤルホテル直営レストラン。クラブスタイルのゆったりとしたスペースで、くつろぎのひとときをお過ごしいただけるサロンです。

また、水の都 大阪の夜景を楽しみながら本格的なグルメが楽しめます。

「いかなるお客様もふらっと立ち寄れて、ゆっくりと歓談でき、ゆったりと寛げるスペースとしてご利用して頂けるように心がけております。」というマネージャーの中路 雅晴さん。

ランチ、ディナー、各種パーティーの相談に応じてもらえる。



大阪市北区中之島4-3-53 TEL06-6444-5214

●大阪市バス(53系統・75系統)田養橋より徒歩1分

- 料 金 / 一品料理(18種類) ￥1,000 ~
ランチコース ￥2,500 ~
ディナーコース ￥4,500 ~
- 定休日 / 無休
- 営業時間 / 平日 5:30p.m. ~ 10:00p.m.
土・日・祝 11:30a.m. ~ 2:30p.m. 5:30p.m. ~ 10:00p.m.
- 席 数 / 44席



ホームページ

<http://www.onc.osaka-u.ac.jp>

フリーメディアスペースと適塾玄関模型

サイバーメディアセンター豊中教育研究棟の各階には、フリーメディアスペースが設けられ、情報教育端末や情報コンセントが設けられ、教育用計算機のアカウントを持つ学生であれば、自由にこれらの端末や情報コンセントを利用することができます。特に水辺のラウンジと名付けられた地下1階部分から3階までは吹き抜けとなっており、建物に開放感を与えていると同時に豊中キャンパスから東の方向を見渡せる広大な空間を演出しています。

1階部分には適塾の玄関部分の模型が設置されています。これは、適塾が江戸時代の最先端の学問に関する情報交換の中核として発展したように、サイバーメディアセンターが大阪大学の情報発信及び多様な情報交換の中心として教育研究に貢献することを祈念して設置されたものです。(適塾玄関模型は、凸版印刷㈱より寄贈)



フリーメディアスペース



適塾玄関模型



交流協定大学紹介

グローニンゲン大学(オランダ王国)

University of Groningen



グローニンゲン大学本部

国立 14 大学のうちの 1 つ。1614 年創立で、オランダで 2 番目に古い大学です。10 学部 (Management & Organization, Economics, Law, Theology, Arts, Medical Sciences, Psychology / Education / Sociology, Spatial Sciences, Philosophy, Mathematics & Natural Sciences) のほかに 30 近い研究所を有する総合大学です。

学生数約 21,000 人 (うち留学生約 1,200 人) で大阪大学とほぼ同等の規模です。

2000 年には日本研究センターが設置されました。このセンターでは、主として、

日本のビジネスや技術に焦点を当て、現在の日本を多角的に研究することを目指しているほか、大学内に設置された語学センターにおいては、日本語講座を提供しています。

グローニンゲン大学とは、2002 年に大学間交流協定を締結して以来、教員及び学生での積極的な交流が行われています。また、今年から海外拠点事務所を同市内に設置し、10 月にはグローニンゲン大学内において開所式及び共同シンポジウムが開催されます。

所在地 : Broerstraat 5, P. O. Box 72, 9700
AB Groningen THE NETHERLANDS
<http://www.rug.nl>



Martini Tower

阪大 Now No.85 2005.10

編集・発行 大阪大学広報委員会 (総務部評価・広報課) 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
電話 : 06 (6879) 7017 FAX : 06 (6879) 7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大 Now」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail : souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp